



長野県看護大学学報

発行:長野県看護大学広報・交流委員会 〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694 Tel.0265-81-5100
ホームページ (http://www.nagano-nurs.ac.jp/)

開学16年目の新体制がスタート!!



2010年4月1日に着任された阿保順子新学長(右)と清水嘉子新学部長(左)

目 次

■巻頭言		
アルプスの山々から学ぶ精神の遠近法	阿保順子	2
ご挨拶	清水嘉子	3
■本学初の「小児看護専門看護師 (CNS)」誕生!		
小児看護専門看護師を取得して	加賀田真寿美	4
■看護実践国際研究センター活動報告		
看護地域貢献研究部門		5
異文化看護国際研究部門		9
看護実践改革・学外機関交流推進研究部門		10
■教育実践活動報告		
2009看護海外研修@ San Francisco.	北澤美佐緒、白鳥さつき、山崎章恵	11
平成22年度新入生オリエンテーション合宿@たつの	岩崎朗子、花岡郁美、藤そら	13
■平成21年度長野県看護大学研究集会 報告	FD委員会 早出春美	16
■新任教職員自己紹介		18
■リレーエッセイ		
長野県看護大学での4年目を迎えて	太田克矢	22
成人看護学講座に異動して	早出春美	22
■OBだより		
サンフランシスコからの風 連載第1回「UCSF就職??」	柿沼佑果	23
■事務局からのお知らせ		24
■同窓会(鈴風会)からのお知らせ		26
■付属図書館通信 No.6		27
■2010年度オープンキャンパス・公開講座のお知らせ		28

巻 頭 言

2010年度、開学より16年目を迎えた長野県看護大学は、4月より阿保順子学長をお迎えし、清水嘉子新学部長との新体制がスタートしました。着任以来、早々に長野県看護大学の行動指針に基づいた5カ年計画の立案、大学運営委員会の試行、大学評価委員会の設置など様々な改革に着手され、大変お忙しい中、両先生の大学運営に対するお考えをお寄せいただきました。

アルプスの山々から学ぶ精神の遠近法

学 長 阿 保 順 子

札幌から石狩平野に向かっておよそ1時間、原野の中に突如サーモンピンクの建物が見えます。北海道医療大学です。前学長の深山先生と一緒に仕事をした場所です。この4月にその北海道から駒ヶ根へ移り住みました。ずいぶん遠くに来た感じがしました。おおよその日本人は、どこから見たって北海道こそ遠くに違いないのに。おもしろいものです。この遠近感覚は。

駒ヶ根に来て、遠近感覚のおもしろさを知るきっかけになったのが、アルプスの山々です。長野県看護大学が建つ駒ヶ根市は、南アルプスと中央アルプスに挟まれた谷あいの町というのが私のイメージでした。しかし、市のキャッチフレーズは、「アルプスがふたつ映える町」です。なかなかしゃれています。3千メートル級の高い山々は、圧倒的な近さで迫ってきます。時には、手で押し出したい衝動に駆られます。「ちょっと、近すぎ!」と。そうなんです。人と人の間にも、自然と人の間にも、そこには適切な距離というものがあります。アルプスの近さと対照的なのが、北海道医療大学から見える山々です。こちらはやたら遠すぎます。どこかのいたずら坊主が、本当はあったかもしれない山々を全部消しゴムで消していったにちがいないと思わせるほどです。研究室の窓から見える山々までは、えらく茫漠とした平原が続いているのです。何もありません。ときどき思い出したように、石狩川にかかる橋がキラリと太陽に反射するだけです。

二つのアルプスの山を見上げるたびに、思い出すことがあります。記憶がかなり曖昧になっているので、お話するのも気がひけますが、新興宗教の教祖の話です。大本教の開祖である「出口なお」か、踊る宗教の「北村サヨ」のどちらかであったような気はしますが。今は教祖様としておきましょう。その教祖様に神が降りてきた時の地理的背景の話です。教祖になった人が暮らしていたのは、後ろには山々が迫り、目の前は海という、逃げ場のない地理的状况にある場所でした。その中で、彼女は極度の貧困と、脳卒中の後遺症をもつ夫を介護しながら孤立無援の現実には長い間おかれま。精神的、身体的な絶対的孤独と、前に進むことも後ろに下がることもできない地理的な進退両難において、彼女の身に神が降りてくるのです。神の声を自分のミッションと確信していきます。絶対孤立からもたら

されるカタルシスです。神が降りてきたり、神の声を聞くというのは、特殊なことに思われるかもしれませんが、そうでもありません。最近出されたジュリアン・ジェインズの画期的な著書『神々の沈黙』によれば、人間の意識というのは、わずか3千年前頃に生まれたそうです。それまではどうしていたかということ、人々は右脳で神の声を聞き、それに従って左脳で行動していたそうです。今もまだ統合失調症の人々を苦しめている幻聴は、その時代の名残りだという説です。

話を戻しましょう。つまり、地理的状况は、人々の精神のありように色濃く影響するのです。風土と呼ばれるものです。アルプスの山々の向こう側にある地点を目指そうとするときの、精神的つらさと、そこを抜ければ何かが見えるに違いないという、見えないからこそ抱ける期待の両方は、ここに住む人々の精神の底に横たわっているような気がします。登っても登っても辿りつかないまま、また登ろうとして目が覚める悪夢のようなつらさを想像することができます。そして山の向こうにあるに違いない楽土が、実は、熟しすぎて滅んでしまっていた文明の残滓のような荒涼とした世界であるかもしれないのです。それでも人は、山の向こうに心のベクトルを向けます。これと逆のことが北海道の帯広の風土について言えます。帯広というところは、屯田兵も入植できなかったほどの原野でした。ですから、入植は、依田勉三のような思想家や鈴木統太郎というキリスト者にしか考えつかなかったと思います。皆様には、北海道土産のマルセイ・バターサンドを思い出していただければいいと思いますが、あのお菓子の包み紙の模様が、依田勉三が興した「晩成社」の登録商標です。この帯広では、その後中川一郎氏（中川昭一氏の父）の盟友であったとされる吉村博市長によって、「帯広の森百年計画」が実施されていきます。人口20万人を想定し、帯広市の周囲を木で囲むという、いわゆる十勝モンローの象徴的施策です。こちらは、駒ヶ根の近すぎる山と正反対です。あまりの茫漠さは、人々の心に寄り添なさをしのばせてしまいます。同時に、周囲からの脅威や干渉から身を守るという防衛が働くこととなります。植林は今でも行われているようです。どこまでも続いているかに見える広々とした風景は、人を落ち着かなくさせます。自分の立ち位置を決定するには、

選択肢がありすぎるのです。近い山とどこまでも続く原野、長野県看護大学に赴任して考えたのは、この対称から読み解くことができる精神の遠近法でした。

赴任当時の言葉にできなかった困惑と狼狽の原因の一つによろやく思い至ることができました。心の底に澱のように溜まっているものは、意識に上ってこないぶん、そのことに言葉を与えることはできません。発火し始めてはじめてそれが何であったか分かるものです。立ち位置をその都度自ら規定し、何の抵抗もなく延伸することができていた精神は、外から有無を言わさず囲まれてしまい、引きこもらざるを得ない精神へと転向を余儀なくされていたという

ご 挨拶

今年度より学部長に就任致しました。開学以来13年間学部長が研究科長を兼務する体制から、2年前より学部長がおられました。本学は単科大学ですので、学部長としての仕事は、どちらかといえば縁の下力持ちであって、学内の教員一人ひとりが教育と研究に力を発揮するために、さまざまな意味での環境を調整し整備する役割が大きいかと考えます。そして、教員の持てる力を最大限引き出し、その力を生かす組織を目指します。教員がお互いを尊重し合い、信頼し合う教育環境が学生にとって何ものにも勝るものであり、そのことを日々心にとめてまいります。分野の教授としての仕事に加えての兼務のため、ご期待に添える仕事がどこまで達成できるのか未知数ですが、微力ながら精一杯取り組みます。

少し、自己紹介をいたしますと北海道の出身です。天使女子短期大学衛生看護学科（現在の天使大学）、衛生看護学科専攻科を卒業し、病院助産師、市町村保健師、大学の教員を経た後、横浜市立大学で学位を取得しました。教育は主として助産師教育に携わっております。結婚後3人の子どもの育てながらの生活環境にありましたが、家族がいることでの励みや支え、自分なりの仕事をすればいいという信念のもと、時間がなければどのようにやりくりしていくかを考え、メリハリのある生活を心がけてきました。

看護の専門分野は母性看護学・助産学です。専門が目指す看護は、子どもの誕生を中心とした女性の支援ですが、女性のライフサイクルに対応した様々な問題に取り組みます。また女性を取り巻く周囲の人々や家族の視点を大切にしています。現在取り組んでいます研究は子育てをしている母親に関するものです。その心理や支援についての研究は10年以上を経過し、とくに育児ストレス、育児幸福感を中心とした研究を質的、量的、実験的なアプローチによって論文を発表しています。心理測定尺度を開発しチェックシートによる臨床での活用を目指しています。科学研究費補助金の助成を受けて6年になりますので、区切りとして

ことでしょうか。

近すぎて見えないもの、近くなければ見えないもの、遠すぎて見えないもの、少し遠ざけなくては見えないものを区別できればいいのだと思います。そして、何よりも大事なことは、自分の精神の遠近法を柔軟なものにしておくことです。見えないからといって放り出すのではなく、ほんの少しだけ手元に手繰り寄せて、今は見えない虚空を両手に包んで慈しむことができればそれでいいのだと。

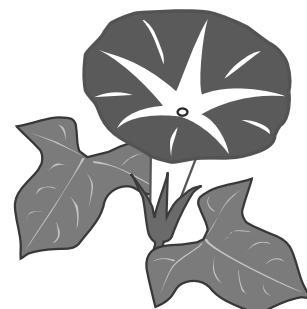
学報にはふさわしくない駄文になってしまいました。論理の外にあるものに最近強く惹かれます。よろしくお付き合いください。

学部長 清水 嘉子

のまとめをしたいと思っていますが……。

本学に着任して6年目になりました。教育は単に知識や技術を学生に伝えることにとどまることなく、教師は一人の人間としての生きる姿を学生に見せることが大切です。卒業後は学生自らが知識や技術を得ていくこと、看護者としての人間性や看護の心を見つめ、わが身に問いかけられる人であることが求められます。そのため、学生が自分に自信をもつこと、社会性や柔軟性、発言力を培うことが教育の課題と考えます。学生自身が成長したことに気づく言葉がけを日頃より心がけたいものです。

今後、看護に対する社会の期待はさらに高まり、社会の要請に応えるべく教育の在り方も少しずつ変わります。とくにこの2年間の本学の課題は保健師・助産師教育の検討、認定看護師教育の準備とスタート、大学基準協会による5年目の審査に向けた点検・評価、さらに小児・老人看護学の専門看護師コース10年目の再評価と少なくありません。大学自らが目標を設定し、そのことを達成するための大学運営に向かって問題を整理しつつ取り組みます。駒ヶ根という自然に恵まれた環境で、長野県が設置する地域に根ざした大学として地域性と普遍性を有した使命を果します。そして看護の力となる実践者、教育者、研究者を育成し、卒業生・修了生を社会に送り出すために、新学長、教職員の皆様とともに力を合わせてまいりたいと考えます。どうぞよろしくお願いいたします。



修了後もかわらずに専門看護師審査にむけて温かくサポートして下さったことが認定審査合格へとつながりました。

長野県看護大学大学院で学んだ経験、出会った先生方から受けた学びは私の誇りであり、専門看護師としての実践につなげていきたいと思っています。そして何より看護師として出会った子どもたちは、私に大きな学びを与えてくれました。病気とともに生きること、残された時間を精一杯生きる子どもたち、その一人ひとりから学んだことを忘れずに、子どもの言葉にならない思いを受け止め、その子のもつ力を引き出しつづける看護をしたいと思っています。

少子高齢化がすすみ、子どもや養育者の環境は大きく変化しています。児童虐待や犯罪の低年齢化、慢性疾患患者や小児の精神疾患の増加、養育者の育児不安など小児を取り巻く状況は非常に厳しく、また看護ケアを必要としている子どもは、医療施設にとどまらず在宅や施設、学校などさまざまな場に及んでいます。子どもと家族、さまざまな職種と協働しながら入院という点での関わりでなく、その後の生活にも視点をおき、点から線へとつながる支援をし

たいと思っています。

小児看護CNSとしてようやく一步を踏み出したばかりですが、子どもたちのために精一杯努力していきたいと思えます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(本学博士前期課程修了、JA長野厚生連佐久総合病院小児看護専門看護師)



恩師内田教授と 修了式にて

看護実践国際研究センター活動報告

I 看護地域貢献研究部門

1. 在宅療養者と家族のための移行期看護プロジェクト

リーダー : 安田貴恵子

メンバー : 北山秋雄、那須裕、野坂俊弥、唐澤由美子、
千葉真弓、柄澤邦江、御子柴裕子、
岩崎朗子、下村聡子、酒井久美子

1) 背景

人口の高齢化や生活習慣病の増加にともなって、在宅で療養生活を送る人が増加してきています。一方、医療費削減の動きは、入院期間の短縮化に伴い病気や症状を抱えながら退院せざるを得ない療養者の増加をもたらしています。在宅で療養する人は、家庭内や地域社会での役割を担いながら、その一方で、通院しながら自己管理をしなければならず、療養者だけでなく生活を共にしている家族も療養者とともに闘病しているといえます。特に、入院加療後退院してから、あるいは施設から退所してからの移行期における過渡期的状況での療養生活は、生活環境が大きく変化するため、療養者と家族にとって心身両面への影響は大きく、支援の必要性が高いと考えられます。

2) 目的

本プロジェクトは、療養者とその家族の退院・退所後の過渡期的状況にある移行期に着目して、療養者および家族の援助ニーズを明らかにし、療養者および家族の健康レベルの維持向上を図るための看護支援について探求し、移行期における看護介入プログラムの開発および移行期看護モデルを構築するための研究活動を展開しています。

また、本プロジェクトは、平成15年度から継続して科学研究費補助金を受けています。

3) 主な活動

(1) 脳血管疾患発症後の在宅生活への移行(生活の再構築)のための支援方法の検討

平成18年度から学術振興会の補助金(基盤研究C)を受けて取り組んでいます。軽症脳血管障害者の看護ニーズ・学習ニーズについて調査を行い、その結果をもとに支援方法を検討しました。平成21年度からは、3年間の研究を進展させ、支援を試行して実践可能な支援モデルを検討しています。

(2) 退院支援における医療機関と地域ケアサービスの連携方法の検討

退院に向けた支援について、医療機関の関係者、在宅ケア従事者らによる事例検討会等に参加して、実践上の課題について意見交換を行います。

(3) 外科的治療後の在宅生活への移行における看護方法の基礎的研究

平成20年度から学術振興会の補助金(基盤研究C)を受けて取り組んでいます。外科的治療後、動作を広げていく際に創部にどの程度負担がかかるのか、その評価方法を検討しています。

2. 遠隔看護開発基盤研究プロジェクト

リーダー: 北山秋雄

メンバー：安田貴恵子、那須 裕、清水嘉子、野坂俊弥、
太田克矢、小田和美、千葉真弓、小林玲子、
宮澤美知留

学外メンバー：縄秀志（高崎健康福祉大学）、
北山三津子（岐阜県立看護大学）、
戸田由美子（高知大学医学部）、
難波貴代（武蔵野大学）

協力企業：(株)タカノ、(株)知識工学、(株)VCUBE、
(株)ウェブシェア

1) 目的

本研究は、最新の情報通信インフラを活用した遠隔看護機器及びシステムの開発を通じて、訪問看護ステーション等の機能の充実を図り、在宅療養者と家族への質の高いケアサービスの提供と医療費の効率化・低減化に貢献することを目指しています。

2) 主な活動

2002年4月から始まったこの研究には本学の教員や大学院生だけでなく、地元のIT企業、近隣自治体等も参加し、次世代携帯電話システムを用いた世界最高水準の遠隔看護機器及びシステムの開発（システムの名称：遠隔ケアシステム「サラス」）が文字通り産学官の連携のもとで進行しています。2005年12月から本学と駒ヶ根市内の1組の高齢者夫妻宅をフレッツADSL回線で接続して試験運用を開始し、2007年4月から長野県阿南町社会福祉協議会の協力を得てより規模の大きい在宅高齢者の遠隔看護の臨床試験を開始し、2008年6月から本学と駒ヶ根市内の妊産婦宅をフレッツADSL回線で接続して「遠隔妊産婦健診」の試験運用を開始しました。2009年4月からASP型Web会議システムで国内シェアNo.1の(株)VCUBEのシステムと本学が開発してきた遠隔ケアシステム（サラス）を融合して、2010年2月「Webcomcare Salus」が完成しました。加えて、2010年3月、「スーパーユビキタス・コミュニティサービスプロジェクト(Super Ubiquitous Community Services Project in Komagane (略称：SUCOS Project))」を駒ヶ根市の協力のもとで立ち上げ、今後Webcomcare Salusを事業戦略の中核として位置づけ積極的に活用／展開することとなりました。この分野では本学が世界をリードする位置にあり、既に特許（出願番号特願 2003-302676）を出願して研究を進めています。「遠隔看護学 (telenursing)」または「遠隔ケア学 (telecare)」という学問の創生も視野に入れた「夢」のある研究です。

3) 助成金

- ①平成17-19年度日本学術振興会科学研究補助金基盤研究 (B) (直接経費 1270万円) 代表：北山秋雄
- ②平成20-23年度日本学術振興会科学研究補助金基盤研究 (B) (直接経費 1350万円) 代表：北山秋雄

3. 高齢者水中運動プロジェクト

リーダー：那須 裕

メンバー：飛弾浩一、細田江美、松澤有美、曾根千賀子、
千葉真弓、渡辺みどり、中畑千夏子、
坂田憲昭、宮越幸代、野坂俊弥、御子柴裕子、
喬 炎、岩崎朗子、藤原聡子、北山秋雄、
秋山知也、酒井久美子、小林玲子、本田智子、
太田克矢

平成7年の開学時に、奥野茂代教授（老年看護学）のご指導で「高齢者の健康と生活に関する研究」を開始いたしました。この4年後の室内プールの設置を機に、研究成果の地域高齢者への還元を実施すべく、ニーズにも応じたヘルスプロモーション活動として、本研究プロジェクトが始まりました。以来11年が経過し、現在、那須教授をリーダーとして、多くの教員の参加により教室の開催が維持されています。

現在は月に3回インストラクターを招いて水中運動教室が開かれており、年1回の骨密度・身体機能測定と年3回の健脚度測定などで運動効果の検討を行なっています。昨年度は、飛弾助教が「唾液由来の生化学的指標から見た高齢者の水中運動効果」の演題で成果発表を行いました（第4回の信州公衆衛生学会）。これまでにも長野県看護大学特別研究費を3年間、文科省科学研究費を2回（各3年ずつ）受けております。

本プロジェクトへの教室参加者は大学の様々な行事や研究への協力、また地域と大学を結ぶ様々な役割を担って下さっている同志のような存在で、11年間一緒に歩んで下さった方々も数名おられます。更に、11年間のそれぞれの時代の学生たちの協力を得て継続してこられたのであり、地域の高齢者と学生との交流の場としての役割をも担っております。

本年3月24日（水）に実施された骨密度測定会には、大荒れの天気だったにも拘わらず、143名の方々が集まって下さり、またこの4月からの水中運動には22名の方が新たに参加することになりました。

本年度は、このプロジェクトへ熱い情熱を注いで来てくださいました那須教授が定年を迎えられる節目の年となりました。今後とも地域の方々の方々の健康の一端を担う本プロジェクトへの応援とご指導をよろしく願います。

4. 終末期看護研究プロジェクト

リーダー：渡辺みどり

メンバー：鈴木英子、多賀谷昭、小田和美、柄澤邦江、
千葉真弓、細田江美、曾根千賀子、松澤有夏
学外メンバー：荒井祐子、原田美香

1) プロジェクトの概要

死を迎える人やその家族はもちろん、その友人や周囲をとりまく看護職者・介護職者も対象に幅広く終末期ケアを

とらえ、看護学の立場からケアやシステムのあり方を考えようとしています。今年度も「高齢者」、「家族」、「介護保険施設」、「認知症」、「事前意思」、をキーワードに3つの研究活動を推進していきます。

2) 今年度の活動計画

(1) 介護老人福祉施設における認知症高齢者と家族の終末期看護介入プログラムの開発

(長野県看護大学特別研究費助成研究)

〈面接調査結果にもとづいた介入プログラム作成と実施〉

昨年度は、面接調査に協力の得られた25施設に対し面接調査を行いました。今年度はその分析結果をふまえて、認知症高齢者と家族への終末期看護介入のプログラムを作成します。このプログラムのもとに介護保険施設での終末期ケア実施とその評価を行う予定です。

(2) 介護保険施設の認知症高齢者の事前意思を尊重した終末期看護介入方法の開発

(科学研究費 基礎基盤研究C)

〈面接調査の結果の分析〉

昨年度実施した面接において全国25施設の看護管理者からデータが得られました。今年度の活動の第一段階として以下の視点で分析を進め、介護保険施設における看護介入方法の構成要素を明らかにしていきます。

- ①看護管理者が「認知症高齢者の意思を尊重した終末期ケアが提供できた」と捉える看護の構成要素にはどのようなものがあるか
- ②看護の構成要素の根拠となる事実とはどのようなものであるか
- ③客観性の担保のために、専門家とのディスカッションを実施する
- ④終末期ケアのために必要な施設職員教育のあり方を検討する

〈抽出された看護介入構成要素の介護老人福祉施設への適用の検討〉

今年度の活動の第2段階として、面接調査結果より得られた看護介入方法について、現場での適用可能性について老年看護学研究者6名でディスカッションを行い検討し、実施評価をしていきます。

(3) グループホームにおける認知症高齢者への終末期ケア方略に関する研究

(科学研究費 基礎基盤研究C)

〈面接調査の実施〉

昨年度の調査では、終末期ケア提供の現状と課題への取り組みに対する質問紙調査を行い、施設の終末期ケア提供の現状ならびにそれぞれの施設が抱えている課題に対する取り組みの現状を把握しました。今年度は、それぞれの施設が終末期ケア提供のためにどのようなケア体制を整えたか、その内容と過程ならびに終末期ケアの課題に対する取り組みの詳細について聞き取る面接調査をおこないます。

①昨年度の調査時に面接調査に対して協力の意思を示したグループホームから対象施設を選定し、再度面接について依頼、実施する

②得られたデータから終末期ケアの体制とその整備過程の内容と特徴を把握する

③終末期ケアの課題に対する取り組みの内容を明らかにする

(4) 研究成果の公表

昨年度行った3つの研究活動の成果を、日本看護福祉学会(7月 広島市)、日本老年看護学会(11月 宇都宮市)で公表予定です。

5. 長野県の高校教諭支援プロジェクト

リーダー：鈴木英子

メンバー：有賀美恵子、北村育子、森野貴輝、太田克矢、那須裕、多賀谷昭

1) 背景

進学者数が増える一方で、不登校の生徒数も増加している。文部科学省は平成13年に全国の不登校数が13万人を超えたことを機に、「不登校問題に関する調査研究者会議」を設置して対応に当たってきた。しかしながら、不登校者数の減少には至らず、平成18年度の全国の国公立小・中・高等学校生徒の不登校者数は184,438人告されている。不登校の経験は、その時期に大切な同年代の仲間との対人関係や集団への適応を阻害し、対人に陥るリスクを高める。また、一般的に他人の視線が気になる高校生において対人不安が強まることが知られているが、対人不安に陥ると他者との接触を避けることで不登校が助長されることが危惧される。対人不安に関する先行研究では、対人不安の形成や維持に関わる要因が様々あげられているが(岡田1997;松尾ら,1998;川崎ら,2007)、地域差や具体的サポートに関する研究や提言までには至っていない。

実際に学校においては、保健室利用者が年々増加しており、保健室登校をはじめとし、別室登校をする生徒の増加もみられる。日本学校保健会(2006)の保健室利用状況に関する調査報告書によれば、平成18年度の過去1年間に「心の問題」のために、養護教諭が継続支援した児童生徒がいる学校の割合は、小学校76.8%、中学校93.1%、高等学校95.8%で、ほとんどの中学校、高等学校が該当する。そして、調査対象児童生徒1000人あたりの人数は、小学校6.7人、中学校26.2人、高等学校18.8人で、平成13年度(小学校5.9人、中学校20.5人、高等学校14.8人)と比較して増加している。

こうしたなか、不登校対策は、養護教諭とスクールカウンセラーに任される面が多いと考えられる。しかし、高校性の対人不安に大きく影響を与え、直截的サポートが可能である高校教諭に対して援助することは重要な課題であると考えられる。

2) 目的

本プロジェクトは、高校生の不登校や対人不安の関連要因や影響要因を明らかにし、それを高校教諭及び養護教諭に啓蒙すると同時に、検討会を開き具体的予防策の構築を目的としている。

3) 主な活動

まず、高校性の不安、不登校につき、地域性が考えられる。長野県の高校教諭支援にあたり、長野県の高校生の不登校及び対人不安の実態について明らかにする。これについては、長野県の高校のうち、無作為に選んだ3校の高校1年から3年生を対象に、対人不安を対人恐怖心性尺度(堀井・小川1997改編)により測定し、属性及び対人不安と関連のあると思われる変数の質問紙調査を実施し、対人不安の関連要因を明らかにする研究に着手している。さらに研究をすすめる、対人不安の予測因子を明らかにし、これらをもとに、高校教員にたいし、研修会や意見交換会を行い、啓もう活動を行う。これらを基盤として、高校性不登校、対人不安予防施策を作成してゆく。これにより、高校性の対人不安や不登校の予防に貢献すると考える。さらには、高校生のメンタルヘルスの健全化に貢献しようとするわが校の取り組みについて理解が得られる。

6. 看護職者の教育・支援プロジェクト

本プロジェクトには、以下の2つのチームがあります。

- ①カウンセリングに基づいた看護職者の人間理解、援助、コミュニケーション能力向上支援プロジェクト
- ②長野県内の病院に働く看護職者の労働災害および職業性暴露を予防するための教育支援プロジェクト

です。現在、①のカウンセリングに基づいた看護職者の人間理解、援助、コミュニケーション能力向上支援プロジェクトは休止しておりますので、②の活動についてご紹介します。

1) プロジェクトの紹介

「長野県内の病院に働く看護職者の労働災害および感染性病原体と抗がん剤の職業性暴露を予防するための教育支援プロジェクト」について

リーダー：白鳥さつき

メンバー：渡辺みどり、中畑千夏子、早出春美、西村明子、葛城彰幸

学外メンバー：松本あつ子(信州大学医学部付属病院看護部長)、伊藤まさ江(伊那中央病院看護部長)、西澤喜代子(長野県看護協会協会長)

(1) 活動の背景

従来、看護職者は患者の安全性に焦点を当ててケアを提供してきたため、自身の健康障害については、その責任は個人へと向けられていました。1998年、国際看護師協会とアメリカ看護師協会の共催による「保健医療従事者のための労働災害(職業上の健康障害)に関する国際会議」にお

いて「“Health Care is risky business” 看護職はハイリスクグループである」と初めて認識され、組織的な対策の必要性が示されています。

日本では1999年、日本看護協会の調査によって、病院や保健福祉施設に働く多くの看護職者が業務上の危険を知りながら、徹底した対策を講じていない実態が報告されました。2004年に作成された「看護の職場における労働安全衛生ガイドライン」では、「電離放射線」、「感染症」、「ラテックスアレルギー」、「殺菌用紫外線」、「抗がん剤」、「消毒薬(グルタルアルデヒド)」、「エチレンオキシド」、「腰痛」、「シフトワーク」、「VDT作業」の10項目が組織的に取り組む必要性のある項目として提言されました。

具体的な内容としてはCDCガイドラインに基づくスタンダードプリコーションの知識が不十分であったり、知っていても対策を講じていないなどの実態があります。また、抗がん剤暴露に関しては、既に1979年にFalkによって抗がん剤治療中の患者のケアにあたる看護師の尿中に変異原性物質があることが証明されています。しかし、日本における対策はかなり遅れています。また、ラテックスアレルギーや電離放射線対策への関心の低さなども指摘されており、深刻な状況です。つまり、我が国の看護職者の労働安全衛生に関する認識は、未だ低いのが現状といえましょう。

各自が自分の身を守るためには、最新の知識を得、実践できることが要となります。そこで、長野県内の病院に働く看護職者を対象として、現状ではどの程度の知識を持って、どの程度の予防策が講じられているか実態調査を行い、その結果に基づいた教育研修を企画することをねらいとしました。今回は、「感染症予防対策」、「ラテックスアレルギー対策」、「抗がん剤暴露予防対策」「暴力・ハラスメント対策」に焦点を当てて調査を行いました。

調査に当たって、長野県看護協会の西澤喜代子協会長、信州大学医学部付属病院の松本あつ子看護部長、伊那中央病院の伊藤まさ江看護部長のご協力を得ることができました。3人の学外の協力者には質問項目の検討や研修の企画に関するアドバイスをいただいております。

調査結果の概要は、5段階で評定を求めた各項目に関する知識及び予防策について、すべての項目で看護管理者が看護師に比べて有意に高い値という結果を得ました。全体に知識、関心が高かったものは「標準予防策について実施すべき状況と具体的対策に関する知識」、次いで「針刺し切創事故を起こした場合の対応策」でした。一方、低かったものは「患者・同僚および第三者による物理的暴力(叩く、殴るなど)への予防対策」、次いで「抗がん剤に暴露した際の対応や処置」、「抗がん剤付着物の廃棄処理」など、暴力への予防策と抗がん剤暴露への知識や対応でした。

また、直接作業に携わる看護師の回答では、抗がん剤暴露予防に関するマニュアル整備は18.0%、個人防護具の着用は19.9%、安全キャビネットの整備は3.6%と低く、現実

には厳しい環境に置かれていることが明らかとなりました。

暴力に関しては、記述で回答を求めた内容から医師や上司からの深刻なハラスメント、患者からの物理的暴力や暴言、セクシャルハラスメントの実態も明らかにされています(精神疾患や認知症患者との関わり上発生した内容は除外)。

今回の調査結果から、知識や予防策が十分でなく緊急性の高い内容を取り上げて県内の看護職者向けに研修会を企画中です。この研修会は継続的に実施する予定で、実施後に学習効果を評価し、その結果を反映させてフォローアップ内容を検討します。将来的には病棟の看護職者と協働し、行動レベルで確実に実現できるプログラムの作成を目標とします。また、これらの実現には組織的対応が不可欠なため、実態調査によるデータをもとに各施設の管理者に向け

た説明会や講習会も必要になると考えています。

(2) 2010年度の具体的活動内容

2010年度8、9月に向けて以下の研修会を企画中です。

- ①感染の危険を伴う病原体への暴露について
- ②CDCガイドラインに基づくスタンダードプリコーションと実際の看護場面への応用について
- ③抗がん剤暴露について
- ④抗がん剤暴露予防の防護具と対策について

以上を予定しております。講師には県内外の専門看護師や認定看護師も招いて講義を受ける予定です。

(3) 助成金について

本プロジェクトに関する調査については平成22年度長野県看護大学特別研究費の助成を受けて実施します。

Ⅱ 異文化看護国際研究部門

人間がよりよく生活できるよう援助する看護は、文化の違いに常に敏感でなければなりません。人間の生活を成り立たせているのは文化であり、どのような生活がよいかを決めるのも文化です。文化は国や民族だけでなく、地方や年代によっても異なります。現在の部門の活動には、国外の看護学研究者との交流と、日本で暮らす外国人の援助とがあります。

1 組織

部門長：多賀谷昭

メンバー：鈴木英子、内田雅代、北澤美佐緒、北山秋雄、白鳥さつき、草出春美、喬炎、田中真木、藤原聡子、中畑千夏子、御子柴裕子、宮越幸代、山崎章恵

学外顧問：Anne J. Davis、小西恵美子、Anita L. Fisher

2. 活動

現在実施している5つのプロジェクトの活動を以下に紹介します。カッコ内はメンバー、うち○印はプロジェクトリーダーです。

(1) サモア国立大学との学術交流 (○御子柴裕子・多賀谷昭・宮越幸代・内田雅代・中畑千夏子)

JICAの草の根技術協力事業として、交流協定を結んでいるサモア国立大学と、サモアにおける子どもの肥満と生活習慣病の予防を目的とした事業を実施しています。昨年9月に発生した津波災害のために中断していますが、近く再開する予定です。

(2) 外国籍市民への健康支援活動 (○宮越幸代・西村明子・早出春美)

2004年以来、ポルトガル語による母親教室を年2回開催し、ブラジル人女性が文化の異なる日本で安心して出産できるよう援助しています。昨年度は、不況で分娩件数が大幅に減ったため、1回だけの開催でしたが、人数は減って

も母親個人のニーズは増加しています。

(3) UCSF・USF看護学部との交流 (○白鳥さつき・鈴木英子・山崎章恵・北澤美佐緒・田中真木)

カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)とサンフランシスコ大学(USF)との学術交流のため、毎年1回教員と大学院生が両大学の看護学部を訪問しています。昨年度は3月に現メンバー3人を含む教員4人が訪問し、教育と実践の現場を視察するとともに、両国の看護教育や、専門看護師、ナースプラクティショナーの養成課程や活動について情報交換や討論を行いました。

(4) 中国医科大学との学術交流(○喬炎・北山秋雄・藤原聡子)

中華人民共和国の遼寧省瀋陽市にある中国医科大学と学術交流を行っています。昨年度は8月に中国医科大学の医学部生8名と教員2名が来訪して見学や情報交換を行い、9月にはメンバー3人が中国医科大学を訪問してミニシンポジウムにおける発表や討論、情報収集を行ないました。

(5) サモア国立大学との学生交流事業「国際看護実習」の評価 (○宮越幸代・多賀谷昭)

国際看護実習は2004年に始まり今年で7回目です。偶数年はサモア国立大学、奇数年は本学で相手校の学生を受け入れ、双方の学生が共同で患者を受け持つ形で実習を行って来ました。その成果を学生、教員等、参加者の視点から明らかにするための面接を開始しています。

上にあげた5つのプロジェクト以外の活動としては、10月下旬から11月初旬にかけてメンバーの宮越と御子柴が9月29日の津波で被害を受けたサモア現地へ行き、被災地での協力活動に参加するとともに、本学で集まった義捐金(換金して4,877米ドル)をサモア国立大学長経由で災害対策本部に届けました。また、宮越は部門の活動を通して得た知識や経験を生かして学部の異文化看護学(今年度から「多文化共生看護学」に改名)、国際看護実習、修士課程の国際看護論など、異文化看護に関係する科目を担当しています。

Ⅲ 看護実践改革・学外機関交流推進研究部門

本部門は、病院、診療所、訪問看護ステーション、在宅ケア支援センター、保健所、保健センターなどの看護現場や、企業、研究機関、国・県・市町村などの産業界・自治体との共同研究や受託研究を通して、①看護実践改革や、②地域振興を推進するための大学の窓口となる部門です。本部門は、県内でも並びない看護学の研究・教育機関である本学の「知の蓄積」を活用して、地域社会に貢献することを目指しています。

2010年度も引き続き、学外機関からの共同研究・受託研究やコンサルテーションの申込の窓口として、学内の各研究領域とのマッチング、助言、情報収集等の活動を行っていきます。

また、長野県全県あげた産学官連携の活動である「信州産学官連携機構」に引き続き参画します。

1 組織

部門長：小田和美

メンバー：太田克矢、北山秋雄、喬炎、本田智子、
秋山知也、小林資典事務局長

2 学外機関における研究活動の広報活動

本学は看護の単科大学ではありますが、幅広い分野の教員が研究に取り組んでおります。これらの研究成果と産業界をつなぐために、様々な機会を捉えて研究活動の広報を行っていきたくと考えております。環境、医療・福祉の分野は現在注目されており、本学の「知の蓄積」が地域振興のきっかけになることを期待してやみません。

2009年度には、長野県は文部科学省・経済産業省の推進する産学官連携拠点の地域選定制度に採択され（6月）、信州大学が中心となって県内地区毎に産学官連携促進のための会議が開催されました。12月には、南信地区において「地域中核産学官連携拠点コーディネーター（CDN）会議」が開催され、本学も参加して研究活動についての紹介をしました。これは、地域の産業界に看護大学の研究活動をPRするよい機会となりました。

3 共同研究・受託研究の窓口としての活動

本部門は、大学の産学官連携の窓口として共同研究・受託研究の問い合わせに対応しておりますが、2009年度は、2008年度秋からの不況の影響が続いているようで、新規の共同研究・受託研究についての問い合わせはありませんでした。2009年度まで継続で取り組まれているプロジェクトは、「看護地域貢献研究部門」における「遠隔看護システム機器の開発」のみとなっています。

しかし、前述のコーディネーター会議の後、（財）長野県中小企業振興センターのコーディネーターを通して1件の研究シーズについての問い合わせがあり、関係する教員とともにコンサルテーションを行いました。また、「信州

産学官連携機構」のコーディネーターを通して高齢者介護の機器開発、機能的食品の開発の2件の共同研究の申込があり、当該分野の教員の参加を得て、学外の研究助成への応募に至っております。その他、1件の高齢者介護の機器開発に参加しております。

4 共同研究・受託研究のフォローアップ活動

2007年度に受託研究として取り組んだ「口腔洗浄器の有用性に関する研究」においては、さらに看護の視点で利用者・介護者双方の使いやすさにこだわった改良の過程に参加し、新しい「口腔洗浄器」の商品化に至りました。特に高齢者でも感覚的に組み立てられるように配慮した機器の色付けや、説明書の内容にも工夫を加えました。2010年度に入って、販売促進のためのスチール写真の撮影や、使用方法を伝えるためのビデオ撮影にも参加しております。

このように研究において開発された商品のPR活動にも積極的に参加しております。

5 「信州産学官連携機構」への参加と産学官連携に関する情報の提供（学内向け）

2009年度も引き続き、「信州産学官連携機構」に参加し、ライフサイエンス部門のコーディネーターと情報交換を行って、産学官連携における看護大学の潜在的シーズについて検討する機会を得ました。また、「信州産学官連携機構」より、産学官連携に関する講演会・公開講座・セミナー・フォーラムの開催案内などの情報を教職員にアナウンスしました。2010年度も産学官連携や研究助成などの情報提供を行っていきます。

●学報への投稿募集●

皆様からの学報への寄稿をお待ちしています。

- ◆近況報告：学術・社会貢献のニュース、出版、学会活動、学会参加報告、Conference Report、etc.
- ◆自由投稿：書評、本の紹介、写真、ミニエッセイ、etc.
- ◆お知らせ：勉強会、読書会、クラブ活動、サークル、etc.
- ◆その他：お便り、お知らせ、お勤め本、etc.

お問い合わせ・詳細は、広報・交流委員会学報編集部まで。

E-mail : kyomuka@nagano-nurs.ac.jp

教育実践活動報告

2009看護海外研修@ San Francisco

白鳥さつき 山崎章恵 北澤美佐緒 (以下、分担執筆)

サンフランシスコでの日々とそこから得たもの 北澤美佐緒

本学名誉教授Dr. Anne J. Davisの橋渡しによって2003年から始まったサンフランシスコでの海外研修。大学院修士課程の選択科目「看護海外研修」として授業化されて5年目を迎えた。そして、今回は初めて、大学院生の参加希望者がいないという悲しい現実。勤労学生が増加している本学大学院で、1週間の海外研修に参加できる院生が減少していることが原因と思われる。

加えて、初期から関わっていた教員が少なくなってしまったこともあり、「看護海外研修」の存続をも危ぶまれていた。院生の頃から何度も本研修に参加している身としては、「せつかくのつながりを断ってはいけない」という思いが強かったが、助教の立場では大学院授業科目に責任を持つことができない。もう継続不可能なのか…とあきらめかけ

詳細なスケジュールはこちら。

3月8日(月)@USF	9:15 授業見学 (Advanced Medical Surgical Nursing)
	9:45 授業見学 (Maternity Nursing) ※メンバーが2つに分かれて別々の授業を見学
	12:00 USF教員&学生と交流会 (NCNと、日本の看護教育についてプレゼンテーション)
	15:30 授業見学 (Nursing Research)
	15:30 授業見学 (Advanced Medical Surgical Nursing Skills) ※こちらも2つに分かれて別々に見学
3月9日(火)@USF	8:00 演習見学 (Pediatric Simulation Class) Skills Lab 見学
	12:30 名誉教授Dr. Anne J. Davisを表敬訪問
	16:30 卒業生の柿沼祐果さんとディスカッション
3月10日(水)@UCSF	8:00 UCSF担当者を訪問し、オリエンテーション
	8:30 CNSを養成している教員とディスカッション
	9:00 UCSFキャンパスツアー
	10:00 講義見学 (Health Protection & Promotion)
	12:00 UCSF日本人留学生と交流
	13:15 UCSF Medical Center、Pediatric unit見学
	15:00 UCSF教員とディスカッション
3月11日(木)@UCSF	11:00 Glide Health Center見学
	14:00 The Young Women's Program見学

たが、幸いにも、白鳥教授と山崎准教授が加わってくださることとなり、大学上層部を説得して下さって、今回の教員だけの看護海外研修が実現した。感謝。

さて、今回の研修期間は2010年3月8日(月)～11日(木)の4日間。研修先は、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコにあり、本学と学術交流がある University of California, San Francisco (カリフォルニア大学サンフランシスコ校、UCSF) と、University of San Francisco (サンフランシスコ大学、USF) の2校。4日間の詳細なスケジュールは枠内に示したものである。

このスケジュールは、渡航前に数週間かけて研修先とメールで交渉して決めたものだ。かなり欲張ったハードスケジュールを組んでしまったが、おかげで得るものが多い研修となった。今回は、その中でも筆者にとって印象的だったことについて報告しようと思うので、最後までお付き合いいただければ幸いです。



お世話になったDr. Anne J. Davis (写真前列左)とDr. Patricia Lynch (写真後列右から2番目)、そして研修参加メンバー

1. 学生の心をつかみ続ける講義

看護大学教員となって4年が経過したが、講義中に学生の心をつかみ続けることの難しさも痛感している。いかに学生が楽しみながら、必要な知識を得られるかを考えながら構成を考えるのだけれど、実際は催眠術並みに学生を眠らせて終わってしまう。

そんな悩みを抱えながら見学したUSFでのMaternity Nursingの講義。素敵に歳を重ねてきたという雰囲気教授が、学生の心をつかみ続ける講義の手本を見せてくれた。

講義はパワーポイント (Macなのでソフト名がちがうだろうけれど) を使用して、イラストや写真、アニメーション、音楽、ビデオを効果的に活用した、興味深いものであった。

最初はその日のトピックを整理し、一つ目のトピックについて講義する。ちょっと眠気が襲ってくるかなあ～、というところでYouTubeを活用したビデオが登場。講義に

戻って、一つ目のトピックが終わると、3分ほどのブレイクを入れる。その時は音楽を流して学生同士が話をしたり、トイレに立ったりしても大丈夫という雰囲気が演出され、学生がリラックスする。学生がだらけないタイミングで二つ目のトピックへ。講義が始まり眠気がくるころに、今度はアニメーションとともに警報音のような効果音が鳴り出して、ウトウトしていた学生も目を覚ます。集中力が戻ったところでその日の講義内容を復習できる例題が出される。最後にはその日学んだ知識が含まれたビデオを流して学生の記憶にグイッとねじ込むまとめをして終了。

学生たちは、ユーモアも交えたプレゼンテーションにすっかり引き込まれていた。

テレビなどのメディアを通して情報を得ることに慣れている学生たちにとって、五感に訴える講義が効果的なのは分かっていたが、具体例を見ることができて本当にありがたかった。

帰国して2カ月が経つが、本学でもプレゼンテーションに活用できる媒体はかなり充実しているので、それらを活用した講義構成が出来るよう、少しずつ挑戦している。



講義の様子

言うのは簡単なだけけれど、実践するのは非常に難しく、試行錯誤の毎日である。

2. 日本の看護を発展させるのは日本人だ

本研修をより充実したものにするために大いに貢献してくれている人物がいる。本学の卒業生でSF在住の柿沼祐果さんである。現在は、現地の病院でAssistant Nurseとして働きながら、Registered Nurse (RN)の資格試験に挑戦している彼女は、休日返上で職場を案内してくれたり、病棟管理者とアポイントをとって話を聞く機会を与えてくれたりする。「母校に貢献できて嬉しいんですよ」とサラリと言ってくれるのが、なんだかとてもかっこいい。

今回の研修では、そんな祐果さんとゆっくり話す時間がとれたので、アメリカで実際に目にする看護について話を聞いた。祐果さん曰く、アメリカの看護はすごくシステムティックで、患者さんの全体像をとらえて、患者中心の援助や、患者の心に寄り添った日本の看護を経験し、それを実践したいと考えている自分にとっては、物足りなく感じることもあるという。

祐果さんの働く病棟では、RNは投薬などの医療介入を担当し、ベッドサイドケアはAssistant Nurseが担っているという。患者の訴えがない限りは、治療に必要な処置のみ

を行い、日常生活援助などは他職種に割り振る。入院期間が短いので、看護計画を立てることも少なく、治療的な関わりのみで退院となってしまう。

SFで働くRNの時給は、他の地区に比べると倍以上で、SFで働きたいRNが溢れているので、看護師不足になることはほとんどない。また、多くの他職種が介入するため、RNが担うべき仕事量は日本に比べると少なく、しかも人数が多いシフトも融通がききやすく、とても働きやすい環境が整っている。お金を得るための仕事として考えると、これほど恵まれた仕事はない。

けれど、熱意をもって看護しようとする、多くの他職種によって仕事が細分化されてしまっているために、看護師の範疇を出て、例えば栄養指導をしたり、服薬指導をしたり、病棟でリハビリをしたりすると、その領域の専門職の役割を奪ってしまうため、全人的な看護が実践できない現状があり、それに嫌気がさしてしまう場合があるという。日本はアメリカの後追いをして役割を細分化しようとしている感じがするのだけれど、アメリカと日本の間には大きな文化の違いがあるのだから、日本の良さを残した、日本独自の看護を突き詰めていくべきだという意見で、祐果さんと我々が同意して濃厚なディスカッションを締めくくった。

SFに来ると、必ずこの結論に辿り着く。ディスカッションに加わるメンバーが変わっていても、結局辿り着く結論は、「日本の看護はすごいんだから、もっと自信をもって、日本らしさを出していこう」ということ。そして、それをもっと発展させるのは日本で生まれ育った日本人の役目だと思う。

この文章を書きながら、本学名誉教授で本研修の最初の引率者である小西恵美子先生がおっしゃっていた言葉思い出す。

"Think globally, act locally."

世界を知って、日本のために動く。聞いたときに感動した言葉なのだが、本当に真理をついた言葉だと再確認した。

3. Women's Health Nurse PractitionerとMidwifeの違い

研修最終日に、UCSFの教員によって設立されたThe Young Women's Programという施設を訪問する機会を得た。筆者は現在、生活援助学講座助教として生活援助技術教育に携わっているが、臨床では助産師として働いていた。そのため、このプログラムは非常に興味深いものだった。

名称から想像すると、研究プログラムか何かだと思ったが、実際はWomen's Health Nurse Practitionerが運営する産婦人科診療所だった。SFに限らず、アメリカでは10代の妊娠が非常に多いこともあり、そういった若い妊婦たちをサポートする目的で設立されたため、患者は10代後半から20代前半がほとんどだった。NPが中心になって、妊婦健診や、Birth control、婦人科検診などの外来診療をしている。ここで妊婦健診を受けた妊婦は、UCSF Medical Centerの産科病棟で出産するため、妊婦のカルテは2つの

施設を行き来して、常に妊婦の情報が共有されるようになっていた。

産後は1日で病院を退院するため、その後のフォローもここで行う。小児科診療ができる施設も併設されているので、妊婦健診を受けていた母親が、隣の小児科で引き続きフォローされるケースも多いようだった。

もちろん、病院にも医師による外来診療はあるけれど、医師はゆっくり話を聞いてくれなかったり、冷たかったりするのので、NPに診察してほしいとこの施設に来る妊婦も多いらしい。

日本で言う「助産師外来」の機能を担っているように感じられたため、ここで働くNPに、助産師との役割の違いを質問してみた。すると、助産師は周産期のケアの専門家である一方、Women's HealthのNPは女性の一生に関わるという役割を担っているのが違うとのこと。お互いが連携して、得意分野をサポートする体制が整っていた。私自身も目指している「女性の一生を支える」というシステムがある程度形になっていて、ものすごく感動した。出産場所の集約化が避けられない日本で、よりよい連携システムを考える助けになったように思う。日本ではNPは認められていないので、助産師がNPの役割も担っていくことになる。そう考えると、日本の助産師はもっともっと頑張らなければ！と考えさせられた。今は潜在助産師となっている筆者にも、何かすべきことがあるのではないかと考えさせられる経験となった。

* * * * *

今回の研修も、筆者にとって本当に実り多いものであった。「看護海外研修」を経験した者として、大学院生や助手・助教の皆さんに伝えたいこと。それは、ぜひ、一度参加してほしい、ということ。私の拙い文章では、現地で感じ取ったことの数パーセントしか伝えられない。現地に行って、五感を使って、見て、聞いて、触れて、感じて、考えてみてください。この研修は、参加する人によって感じ方

が全く違うという面白い研修です。素晴らしい体験になるか、最悪な思い出になるか、それはあなた次第。いずれにしても、人生に役立つ経験となることは保証します。

では、引き続き、この研修を救ってくれたお二人の感想をお届けします。

(本学教員、生活援助学講座助教)

感じることの多いサンフランシスコでの日々

白鳥さつき

成田を発つまでは、役割の重さに不安ばかりが先立ちました。でも、現地についてからは、あふれる情報と刺激にそんな憂鬱はどこかに飛んでしまったようです。詳細は報告書にまとめましたので読んでいただければ幸いです。桜が咲くサンフランシスコはきれいな街でしたが、寒さ対策で苦慮しました。冬のコートを着ている人の傍らでノースリーブの女性が歩いている、という冬も夏も同居しているような不思議な光景をよく見かけました。

研修については、北澤助教の英語力に助けられることが多く、感謝の日々でした。そして、もっと自由に会話をしたい！聞きたいことが聞けたら、と切に感じた10日間でした。

(本学教員、看護教育・管理学講座教授)

実りあるプログラムになるように

山崎 章恵

昨年10月に着任した私は、SF visitのこれまでの経過や2009年度の実施が危ぶまれているという状況もよくわからぬまま、担当者となり、怒涛のごとく（大袈裟ですが）研修を実施してきた、というのが実感です。実際に体験したことによって「SF visit」を理解し、今後の課題や展望を自分なりに考えることができるようになりました。限られた時間の中で、実りのあるプログラムにするにはどうしたらいいか、参加する皆さんと考えていきたいと思います。

(本学教員、成人看護学講座准教授)

平成22年度新入生オリエンテーション合宿@たつの

オリエンテーション合宿のこと

岩崎 朗子

大学の恒例行事であっても、時代の流れの中で形を変える必要性に迫られることはあります。たとえそれが「大切」と思えるものであっても免れるものではありません。しかし、本学のオリエンテーション合宿は時代の流れの中で小さな変化は経験しつつも、開学以来目的と枠組みを変えずに受け継がれてきた「稀有な」行事です。

入学式の次の日、学生の皆さんは落ち着かない気持ちと不安と寂しさと、それとは逆な好奇心や希望をない交ぜに持ちながら参加したことでしょう。同窓会の皆様も、上級

生の皆さんも同様に思い返されるのではないのでしょうか。私が始めて参加した時も、教員としてではありませんでしたが、やはり不安と期待の入り混じった複雑な思いでした。アメリカ人の先生と二人きり、「たつの海」と名づけられた池に浮かぶ小島にポツンと残され、オリエンテーションの学生グループを待ちながらたどたどしい会話をしたこと。ポイントの問題「英語でコミュニケーション」の仲介をしたこと。今では信じられないような、カチンコチンの石頭で企画の先生に質問をしたこと。つい先日のことのようです。そんな私の中身をほぐしてくれたのもこの合宿でした。看護職者としてバリバリに働いておられる当時の学生の皆様

はもちろんのこと、教職員との縦横の繋がりを作るきっかけも合宿の中にもありました。

「エンカウンター」には「出会う」という意味があります。オリエンテーション合宿は、この「エンカウンター」の考え方や手法が様々に取り入れられています。企画に携っていた当時の先生方が「カウンセリング」や「エンカウンター・グループ」に造詣の深かったことに起因します。ウォーミングアップの中で、グループワークの中で、「話し合い」も「表現」も、最後のクーリングダウンまで。一つひとつのセッションを経験しながら、新しい友達と出会い、教職員と出会い、先輩と出会い、そして、分かっているようで実は分かっている『自分自身との出会い』の場がくり返されているのです。

私はこの「出会い」に、これまで何度も助けられてきました。気恥ずかしい表現ではありますが、『お互いを信頼しあい、自由に、ありのままの自分で居ることを許しあえる人間関係』は、安心感と新たな一歩を踏み出す勇気を与えてくれます。困り果ててうずくまっている私に手を差し伸べ、引っ張り上げてくれる人との関係を振り返ると、この「出会い」にたどり着くのです。

これからのオリエンテーション合宿が、たとえ役割を終え形を変えても、「エンカウンター」を経験した若い先生方の中に「大切なもの」が根付いている限り、何かしらの意味を持って引き継がれていくものと思っております。新入学生の皆さんが、2年あるいは4年後にご自分宛の手紙を受け取るとき、私たちが伝えたかった「大切なもの（キツネの申しますように、目に見えないのです）」が静かに少しでも根付き残っていますように。あの日得たものに、2年分、4年分の知識と経験と「善き」思い出が重ねられているよう祈っております。

(本学教員、看護教育・管理学講座講師)

オリエンテーション合宿で考えたこと

花岡 郁美

2日間のオリエンテーション合宿では、話すことが苦手な人見知りの人でも、話したことがない人たちと話さざるを得ない“無言”で行う数々の企画がありました。2日間の間でこんなに沢山の無言のやりとりは初めての経験でした。私の中では、無言劇が一番苦手でしたが、皆の想像力や行動力には大変驚きました。それぞれのグループが工夫を凝らし、見ていて「よく考えた」と思える劇ばかりでした。先生たちの劇では、先生たち自身が楽しそうで、見ている私までもが楽しくなるような劇でした。他にも、絵を描いての自己紹介や、みんなで協力しなければ達成できないような無言で行うゲームなど。ここまで無言で行う企画ばかりを考えたのは何故だろうと考えてみましたが、無言だからこそ一生懸命伝えようとし、相手の行動一つ一つに注意を払って耳を傾けることができるようになるのか、と

思いました。

途中ではバレーボールの試合も行いました。名前をしっかりと覚えていなかった人達とチームを組むことで、コミュニケーションが必要なバレーボールでは、苦勞もしましたが最終的にはとても記憶に残っている企画の一つとなりました。バレーボールを行うことの意味はあまり深く考えていなかったのですが、看護コミュニケーション実習で野坂先生から「運動するためにはコミュニケーションが必要」、「運動するとコミュニケーションが生まれる」という言葉を聞き、バレーボールを企画に取り入れた意味を知ることができました。

夜の企画としては、数人のグループに分かれ、自分たちでテーマを決めて話し合うという企画でした。なかなか自分たちでテーマを聞いて話し合うというのは難しく、先生に協力していただきながらですが、話し合いを進めることができました。何人もの話を聞いて、また同じ目標を持っている人達と会話をしている、自分の中の考えが深く広まり、とてもよい刺激を受けることができたと思います。

部屋割りも初対面の人達とでしたがすぐに打ち解けることができ、グループに分かれての話し合いとはまた別に新しい考えを持った相手と出会うことができました。これからの4年間、私も周りの皆も、同じ夢を持つもの同士共に成長していけたら良いと思います。

(本学学部 1年生)



入学して初めてのチーム・ワーク?!ソフトバレー

入学式から二ヶ月

藤 そら

入学式の次の日から、話せる友達もまだ少なく何もわからないままという中でオリエンテーション合宿は、とても緊張した1日目から始まったけれど、帰る頃にはそんな緊張感はなく和んだ雰囲気になっていました。これから始まるキャンパスライフに、とても胸を弾ませていた感覚が忘れられません。

そして今、こうして入学してからの約2ヶ月間を振り返ってみると、時間の流れが速いのか遅いのか全くわからなくなっています。新しい友達や、キャンパス、専門的な講義について行こうと必死になりながらも、日々の日常全体と

してみると充実していると感じています。その反面、実家を離れての1人暮らしには慣れてはきたものの、帰宅して1人の時間になると急に孤独感を感じて寂しくなることがあります。早く休日にならないかな、とか、実家に帰りたいと思うことも……。そんなことを感じる中でもこの2ヶ月間を過ごしてきたのはこの大学で同じスタートを切った友達の存在があったからでしょう。私と同じようなことを感じている人は多くいると知り、それだけで励みになっています。共に学び、たくさんのお話を話し、相談をしてもっともっとお互いのことを分かり合いたいと思います。今は、授業の雰囲気にも少しずつ慣れてきていて、仲の良い友達の輪がどんどん広がっています。そんな環境の中にいるのがだんだんと居心地の良いものになってきているのを感じています。これから勉強はさらに難易度の高いものになってくるし、実習や演習も始まってきます。不安や悩みはもちろんあるけれど、期待する気持ちもあります。仲間と共に確

実に乗り越えて成長していきたいと思います。そして友達や先生方、何よりいつも必ず支えてくれている家族に対しての感謝の気持ちを強く持っていたいとも思っています。

(本学学部 1年生)



「世界で一番きれいな」那須姫に全員がマイッタ！

本学へのご尽力ありがとうございました



2009年3月31日、深山智代元学長より退官のご挨拶がありました。深山先生は2代に渡り、学長として本学の運営・総括にご尽力されました。退職された教職員の皆様に感謝し、皆様のご健勝をお祈りするとともに、駒ヶ根の地で結んだ御縁をもとに、今後とも本学へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



国際看護研究会第13回学術集会のお知らせ

本学で学んだ異文化看護、国際看護の経験を発表してみませんか？

テーマ：「国際看護の研究に取り組む！実践に活かす！」

学術集会会長：宮越幸代 長野県看護大学 国際看護学講座

日時：2010年9月4日（土）10：00開会～17：00閉会（9：30受付開始）

会場：独立行政法人 国際協力機構（JICA）「JICA地球ひろば」（東京メトロ：広尾駅徒歩1分）

内容：一般演題（口演・ポスター）・基調講演 ほか ワークショップ2題

<ワークショップ1> 国際看護研究の実際、そして実践に活かすには？

<ワークショップ2> 国際看護の経験を活かして、世界で働く！

プログラム、参加登録および演題申し込み等の最新情報はHPをご覧ください

<http://www.geocities.jp/kokusaikango2010/index1.html>

学会事務局連絡先：長野県看護大学 国際看護学講座内

E-mail：kokusaikango2010@yahoo.co.jp TEL/FAX：0265-81-5153

平成21年度 長野県看護大学研究集会 報告

FD委員会 早出春美

平成22年3月19日に「平成21年度 長野県看護大学研究集会」が本学大講義室にて開催されました。この研究集会は、①教員がお互いの研究手法を学び、②学内教員間および学外の専門職者とのネットワーク作りの場として活用し、③地域の専門職の方々への看護関連の研究に関する情報発信の場と位置づけ、FD委員会の主要な活動の1つとして、企画・運営を担当しています。平成16年度より開始された本研究集会も、年々少しずつ進化し、今回で6回目を迎えることができました。この研究集会では、長野県看護大学特別研究費を受けて行っている、県内看護職者との共同研究と学内共同研究についての発表と、本学の看護実践国際研究センター（看護地域貢献研究部門、異文化看護国際研究部門、看護実践改革・学外機関交流推進研究部門）の研究プロジェクトおよび県内企業と連携して実施した研究についての報告を中心に行っています。



大学・地域共同研究発表
上原恵実氏(東御市民生福祉部)

今年度は、深山学長の挨拶に始まり、県内看護職者との共同研究が2演題と学内共同研究が11演題の合計13演題の口述発表が行われました。その後、大講義室横の小ホールに場所を移し、看護実践国際研究センターの各センター長による1年間の活動報告と、各研究プロジェクト9演題のポスター発表が行われました（詳細はプログラムをご参照下さい）。学内外から71名の方がご来場くださり、各発表毎に活発なディスカッションが行われました。

学内共同研究では、同じ大学内で仕事をしていても普段はあまり知る機会のない他講座の先生方が、どのようなことに興味関心を持ち、どのようなアプローチで研究を行っているのかを知り学ぶ機会として、また、共同研究者を募る機会としても役立っています。

県内看護職者との共同研究では、地域で働く看護専門職者の方が、実際の臨床現場でどのような疑問を持ち研究を行っているのか、地域住民の健康増進に対してどのような取り組みをしているのか、その成果についての発表が行われ、研究と実践をつなぎより良い医療や看護を提供することに貢献しています。

ここで、今回発表が行われました2演題について少しご

紹介させていただきます。まず、1つ目の演題『地域住民の行動変容に関する「ずくサイズ」の保健指導効果に関する検討（第1報）』では、長野県



赤羽根利美氏の発表
(昭和伊南総合病院)

の方言である「ずく」という地域性を取り入れた健康習慣改善指導の必要性和その効果に関する内容が発表されました。地域住民にとって「ずく」という言葉は、親しみやすくイメージしやすいことから、それを保健指導に取り入れるという着眼点のおもしろさやその活用可能性についてはとても興味深い内容でした。2つ目の演題『看護における倫理的感受性を高めるための効果的な研修方法の探究』では、倫理的感受性を高める研修について検討するため、他の病院で行われている看護倫理研修では、どのような研修成果が得られているのかを調査した結果について発表されました。これらの研究は現在も継続して行われていますので、どのような結果が得られるのか今後の発表が楽しみです。

最後に、FD (Faculty Development) の一環として、また、地域住民の方々および専門職者の方々との協働と交流の場として、皆様方のご意見やご要望を取り入れながら、より良い研究集会にしていきたいと思っております。平成22年度も3月に研究集会の開催を予定しています。詳細につきましては、本学ホームページをご覧ください。皆様方の多くのご参加をお待ち申し上げます。

(本学教員、FD委員会委員)



平成21年度長野県看護大学研究集会プログラム

日時：平成22年3月19日（金）9:00-15:00

9:00 挨拶（深山智代学長）

長野県看護大学特別研究／大学－地域共同研究／口述発表（発表10分＋質疑5分＝15分） 場所：大講義室

1G 座長：多賀谷昭教授

時間	研究（発表）テーマ	所属／講座	研究代表者
9：10	介護老人福祉施設における認知症高齢者と家族への終末期看護介入プログラムの開発	老年看護学	渡辺みどり教授
9：25	一般病院における糖尿病患者とその家族を支援するための医療・看護の現状と課題	成人看護学	小田和美准教授
9：40	慢性疾患をもつ子どもや家族と看護職者とのかかわりと専門職者間の協働に関する実践モデルの開発	小児看護学	内田雅代教授

（休憩 10分）

2G 座長：野坂俊弥准教授

10：05	地域の音環境に対する印象評価	心理学	松本じゅん子講師
10：20	小児が共同使用する玩具の微生物汚染に関する調査	病態治療看護学	中畑千夏子助教
10：35	高濃度天然炭酸塩泉浴による皮膚創傷治癒の促進効果の機序解明	看護形態機能学	喬炎教授
10：50	輸液ライン内の気泡発生抑制の検討	生物・化学	太田克矢准教授

（休憩 10分）

<大学－地域共同研究>

3G 座長：清水嘉子教授

11：15	地域住民の行動変容に対する「ずくサイズ」の保健指導効果に関する検討	東御市民生福祉部	上原恵実氏
11：30	看護における倫理的感受性を高めるための効果的な研修方法の探究	昭和伊南総合病院	赤羽根利美氏

（昼食休憩 11:45～13:00）

4G 座長：白鳥さつき教授

13：00	「南信子どもの虐待防止ホットライン」の取り組みに関する検討	健康保健学	北山秋雄教授
13：15	中国web新聞サイトに現れた「青春期」の性の健康情報	母性看護学	藤原聡子准教授
13：30	長野県内の病院勤務助産師の働き方に関する研究－分娩取り扱い中止施設と集約化施設の勤務助産師の現状－	母性看護学	松原美和助教
13：45	訪問看護師の現任教育の現状と学習ニーズに関する研究	地域・在宅看護学	柄澤邦江講師

（休憩 10分）

長野県看護大学看護実践国際研究センターポスター発表（各部門10分） 場所：3階掲示ホール

14：10	看護地域貢献研究部門	体育学	野坂俊弥准教授
14：20	異文化看護国際研究部門	精神看護学	鈴木英子教授
14：30	看護実践改革・学外機関交流推進研究部門	成人看護学	小田和美准教授
14：40	看護実践国際センター各プロジェクト 在宅療養者と家族のための移行期看護プロジェクト 高齢者水中運動講座プロジェクト 遠隔看護開発基盤研究プロジェクト 終末期看護研究プロジェクト 災害看護研究プロジェクト サモア国立大学との共同研究－サモアにおける子どものヘルスプロモーションプロジェクト－ UCSF／USF 交流プロジェクト－6年間の総括と新たな枠組みにおける課題－ IRC 中国医大チームの活動報告 看護実践改革・学外機関交流推進研究部門		

新任教職員自己紹介

2009年後期～2010年春にかけて、本学に新しくお迎えした教職員の皆さんの自己紹介を講座・事務局の順にお届けします。皆さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

看護形態機能学講座 助教 梁 景岩

平成21年度9月から看護形態機能学講座の助教（臨時任用）として着任しました、梁 景岩（リョウ ケイガン）と申します。中国の東北部出身で、大学院生時代を含めて、茨城県にも10年近く住んでいました。いままでいたところは全部広大な平原地で、自然の恵みを堪能できる長野は大好きになりました。しかし、山からの風はあまりに強くて、ときどき「台風かな」と勘違いしていたのは、私だけでしょうか。いろいろな面で環境が変わって日々戸惑うこともあります。毎日充実した日を過ごしています。家族と離れて、単身赴任でちょっと寂しくなりますけど、これから挑戦したいのは、連休中に子どもをつれて、山に登ることです。

教育・研究において、自分が出来ることすべてを全力で行っていきたくて思っております。看護系大学の教員としては新人ですので、今後ともご指導、ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い致します。

病態・治療看護学講座 教授 坂田 憲昭

今年4月1日付けで着任しました坂田です。早々に歓迎会を催して頂き有り難うございました。オリエンテーション合宿等、皆様とふれあう機会も次第に増えて、徐々にではありますが本学にも馴染んで参りました。これもひとえに、こうした機会を与えて下さいました皆様方のお陰と感謝しております。

私はこれまで関東地方の大学および研究所で過ごして参りましたが、出身は本県の隣であります新潟県の南部、上越でございます。そうしたこともあって、本県には比較的なじみが深くその気候風土も理解しておるつもりでした。しかし、移ってきた3月末は雨の日が多く、しかも吹く風は強く冷たくて、果たしてこの先どうなることやらと、心細くなったのを思い出します。そして5月になり、うららかで澄み渡る、私のイメージ通りの信州の爽やかな気候になってきました。自分自身に周りを見渡せる余裕もできてきた此の頃は、あらためて此の地のゆったりとした環境に心が洗われる思いです。（もっとも、最近では冬の厳しさを吹き込まれ、このところの晴れやかな心持とは裏腹に、これからの行く末を案じてはおりますが…）

塵・芥にまみれてきた我が身といたしましては、この清浄な駒ヶ根の良好な環境のもと、雑念を捨て惑うことなく教育・研究に精進して参りたいと、自分に言い聞かせて過ごす今日この頃です。今後ともどうぞよろしくお願ひします。

基礎看護学講座 助教 伊藤 郁恵

長野県に住みついてからちょうど10年という年月が過ぎました。10年前、新潟市から駒ヶ根市に移住した時は、「空気が薄い」「寒い」「乾燥している」とよく思ったものです。10年経った今ではこのような環境にも何とか馴染むことができ、さらには、晴天の日が多いことや、新緑の美しいこと、水がおいしいこと等よいところもたくさん見つけることができるようになりました。

私はこの長野県看護大学の卒業生です。卒業後は長野県内の病院で看護師として働いていました。教員としては1年生ですが、看護教育者として母校の大学に関われることをとても嬉しく思っています。大学と臨床現場をつなぐ存在になることを目標に日々頑張っていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

成人看護学講座 准教授 山崎 章恵

「アルプスがふたつ映えるまち」駒ヶ根市にある長野県看護大学に赴任し、半年が過ぎました。私が住む松本市も北アルプスが見えるまちで、毎日アルプスを眺めながら通勤しています。長野県看護大学は、美しい緑に囲まれたキャンパスがとても清々しく、花壇も整備されていて本当に素晴らしい環境が整っていると思ひます。また、赴任して真っ先に感じたのは、学生の皆さんがよく挨拶をすること。多くの学生が行きかうマンモス大学と異なり、お互いの顔と名前が一致した関係が築ける環境なのだとも思ひました。対人サービスの基本は挨拶から。笑顔で気持のいい挨拶をすることが自然と身に付いていることは、とても大切なことだと思ひます。長野県看護大学の教育理念として豊かな人間性や幅広い視野を養うこと、看護専門職者として社会に貢献できる能力を養うこと、看護実践における課題の究明に取り組む能力を養うことを掲げています。まずは自分自身がよき看護実践者であること、そして質の高い看護を提供できる能力を培うことを目指して、学生さんとともに努力していきたいと思ひます。

成人看護学講座 助手 増尾 美帆

はじめまして。私の増尾という名字は電話では聞き取りにくいようで、いつも「松尾」と間違われます。そこで最近、「サザエさんのマスオさんのマスオが名字です」と言うようにしています。相手の方には「プッ」と言われることが多く、どういうふうに言えば良いか思案するところです。JICAでエクアドルにいた時は、私の名前をいうとスペイン語のmi hijo（ミ・イホと読み、私の息子という意味

です)と聞き間違えられ、「息子がどうしたの?」と聞き返されていました。名前を名乗ることから、いつもつまづいています。

名前を名乗ること以上に、臨床や看護の勉強ではつまづいたり、落とし穴に落ちたり、はたまた……であったり、いつになったら普通に歩けるのかなあと思っています。

性格は、普通の人とはちょっと(ちょっとかな?)違うところがありますので、何かの折には研究室にお立ち寄りください。では、どうぞよろしくお願い致します。

■ 精神看護学講座 講師 北村 育子

はじめまして。4月より精神看護学講座に着任いたしました、北村育子と申します。

出身地は広島県広島市、原爆ドームと広島カープの街です。臨床は13年、NICUから始まり外科、内科、小児科と経験しました。その後、専門学校の教員を2年、この頃から精神の領域に足を踏み入れました。教員生活に自信が持てなくて北海道医療大学へ編入、そのまま修士課程、博士課程へ行きました。大学院では統合失調症を患う人たちにお話を伺いその体験を論文としてまとめました。私自身も20年近くリウマチを患っており手足が不自由です。病気をもつ当事者の生活のしづらさを、看護職を目指す皆さんに伝える、そういったことができばうれしいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

■ 精神看護学講座 助教 有賀 美恵子

4月から精神看護学講座に着任いたしました、有賀美恵子と申します。よろしくお願い致します。私は、南箕輪村の出身で、3月までは、長野県内の高等学校で養護教諭をしていました。2年前に本学大学院修士課程に入学し、この4月からは博士課程の学生として、そして、教員としてお世話になることになりました。5月からは、はじめて学生のみなさんと実習に行き、学生のみなさんの感性のすばらしさや一生懸命な姿勢、いろいろなことを学びとって成長していく姿に日々感動しています。不慣れたため、皆様にはいろいろとご迷惑をおかけすると思いますが、私自身も学生のみなさんといっしょに学びながら、日々の努力を重ねていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

■ 精神看護学講座 助手 森野 貴輝

はじめまして。4月より精神看護学講座の助手として着任いたしました、森野貴輝(「もりのあつき」)です。奈良県の医科大学を卒業した後、北の大地へと渡り、道南の基幹病院である市立函館病院の閉鎖病棟に勤務していました。出身地は大阪ですが、折にふれ寒冷地へと赴く機会が多く、この度長野県は駒ヶ根にやってきました。南アルプスと中央アルプスに囲まれた大自然で寒気にさらされながら少

しづつ環境に慣れていきたいと思っています。

教員としてはもちろん、看護師、研究者として未熟ですので、至らない点が多々ありますが、学生の皆さんに精神看護学の楽しさを伝え、一緒に学び成長していけたらと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

■ 母性看護学講座 助手 上森 友記子

2月から母性看護学講座の助手として着任いたしました、上森 友記子(カミモリ ユキコ)と申します。総合周産期母子医療センターとその前身である産科病棟に26年間助産師として勤務後、早期退職をしてスペインに約1年間語学留学いたしました。勤務中、青年海外協力隊の助産師隊員としてモルディブ共和国に参加する前、駒ヶ根市の訓練所に3カ月住んだことがあります。再び駒ヶ根市を訪れて感じたことは、お天気が良い日の空が、住んでいた南スペインである南アンダルシア地方の空の青さに似ている事に感動致しました。

教育者としては新人ですが、学生の皆さんに母性看護学の楽しさや助産師としての仕事に少しでも興味を持って頂けるよう、自分の経験を伝えながら一緒に楽しく学んでいきたいと思っております。皆さまには、慣れずにご迷惑をお掛けすると思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

■ 母性看護学講座 助手 西野 自由理

4月から、母性看護学講座に着任しました、西野自由理(にしりのしゅり)と申します。

出身は山口県ですが、大学は福岡県、その後は北海道、宮城県、東京、そして、ここ長野県にやってきました。名前のとおり自分の心の赴くまま日々動いています。

昨年、伊那に住み始め、畑を耕しながら、時に北海道一人徒歩旅(日々テント生活)、時にギニア太鼓旅…という悠々自適な生活を営んでいましたが、ちょうど貯金がつきそうないタイミングで教員の声をかけていただきました。

実は私の学生時代はつい最近のことなのですが、教員という職とはかなり縁の遠いデキの悪い学生でした。なので、今現在学生さんたちと接していると、自分の学生時代と比べて、良く勉強しているし、真面目だし偉いなあと、尊敬のまなざしで見えてしまいます。

あちらこちらをフラフラしていた私ですが、ここの土地や空気、時間が合っているようなので、助産師として、教員として、しばらくはここ長野の地で研鑽を積んでいきたいと思っています。

できの悪かった私だからこそ、ここでできることがある!!と、勝手に信じて仕事をしたいと思っています。

また、助産や女性の体や生き方、人間、畑、アフリカ、などなど皆さんと熱く語り合えることを楽しみにしています。

事務局 事務局長 小林 資典

皆さん、こんにちは。事務局長の小林 資典（こばやし たかのり）と申します。

4月にお仲間入りさせていただきました。事務局の面々は、一見、強面のおじさんも多いですが、個性豊かでやさしいスタッフが揃っています。気楽にお声を掛けてください。我々は、2年から4年位で「人事異動」があります。新しい職場に慣れていくことは誰にとっても大変なことです。どこに行っても必ず「人」のお世話になります。つくづく感じるのは、人を思う気持ちが必ず自らに返ってくることです。一人でも多くの皆さんとお付き合いしながら、「いい仕事」をしたいと思っています。

プライベートでは、我が家の次男坊が大学3年生です。一丁前の社会人になれるのか、ハラハラしながら見守っています。自分の同じ頃を思い出すと偉そうなことが言えないので、奥さんから私がカツを入れられています。学生の皆さんを、我が子と同じに見てしまうおじさんですが、どうぞ宜しくお願いします。

事務局 教務課長 大塚 俊英

4月から事務局教務課でお世話になっている大塚です。自宅は長野市篠ノ井で、初めて単身赴任となり、自炊のレパートリー増強に日々取り組んでいるところです。県の事務職員は辞令ひとつで様々な仕事をしなければなりません。大学の教務はなかなか経験する機会が無い業務であり、皆様のご指導を賜りながら職責を果たせるよう取り組んでいきたいと思っています。

趣味としては、幼少時より空や雲、天気図が好きで、数年前一念発起して気象予報士の資格を取り、仲間と活動をしています。また、これも子供の頃あこがれていたヴァイオリンを3年程前から習いはじめ、家族に迷惑がられながら練習しています（単身赴任になって喜ばれているようです）。

2つのアルプスに囲まれた抜群の環境の中、看護職を目指す学生や看護学発展のための研究に取り組む皆さんの支えになれるようがんばりますので、公私共によろしく願いいたします。

事務局 総務課課長補佐 高橋 和宏

4月に事務局総務課に参りました高橋和宏です。3月までは県議会の事務局にいました。同じ事務局つながりですが、事務局というものは、先生方や学生の皆さんが、より良い環境の中で研究や勉学に励めるよう裏方として支えていく地味ではあるが大切な仕事であると自負しています。

ただ、高等学校の事務職などに就くことがあろうと予測はしていたものの、まさか大学の事務局に来るということは予測しておりませんでした。いささか戸惑いの気持ちも

ありますが、現在本学が抱える様々な課題を考えると、まさに走りながら考え、走りながら学んで行かなければならない状態ではなかろうかと思っています。

それにしても、二十数年前のことですが、大学の事務局のおっさんは口煩かったのを憶えています。自分は掲示板に学籍番号を張り出され、呼び出しをうけては説教ばかりされていました。あろうことか自分の下宿の隣の居酒屋の常連でもあり、バイトに追われて授業をサボっていたこちらの情報はすべて筒抜けでした。

時が流れ、猫とねずみが攻守とを代えて、今では自分が事務局のおっさんとなったわけです。

事務局教務課 主事 加藤 恭央

やっと3ヶ月。長野県職員行政職間では「激務」と恐れられているこの看護大学事務局に赴任したのが、もう遙か昔の出来事のように思われます。右も左もシラバスも知らない自分が年度始めのお祭り騒ぎを乗り越えられたのは、サポートして下さった方々のお陰であり、心より御礼申し上げます。

この大学での主役は、もちろん学生。教務課の仕事は、その主役である学生たちを後方から支援していくことです。学生たちの単位履修に関して、迅速な事務処理に務めます。学生たちが快適なキャンパスライフを送ることができるよう、全力でサポートしていきます。学生たちが自らの夢や目標に向かって大きく羽ばたくことができるよう、応援団となってエールを送り続けます。

何年か後、一人前のナースとなった姿を病院で拝見できる日が来ることでしょう。その時にやさしく看護をしてもらえるよう、今日も公務に励みます。

事務局 教務課保健師 葛城 晴佳

昨年度8月からお世話になっています、葛城晴佳です。ちょうど10年前に本学の学部6期生として入学し、卒業後は県内で助産師として勤務してきました。母校の職員として、また初めて保健師として勤務することはとても新鮮で、日々いろいろな発見や学びがあります。性格はのんびり屋で、よくぼーっとしているのでご迷惑をお掛けすることも多いかと思えます。保健室保健師としては甚だ頼りない部分もありますが、学生の皆さんのお手伝いが少しでもできるよう努力していきたいと思っています。よろしく申し上げます。

産婦人科（妊婦さん・赤ちゃんも含む）での看護に整体的なアプローチを取り入れることに関心があり、全体の研修会に出かけて行っては勉強しています。学部生の頃はちっとも頭に入らなかった解剖学が今はとても楽しく、ちょっとマニアックな筋肉の名前なんかもすんなり覚えられるので不思議です。

好きなことは絵を描くことと、お菓子や工作など、何かを作ることです。(´ー`)/

事務局 学生支援員 堀内 みちよ

今年度、事務局教務課及び図書館でお世話になります、堀内と申します。

昨年まで、付属図書館の方で土曜日と夜間かかわってききました。が、実質的には3年ほどブランクがあり、初めての職場に戸惑い、仕事の勘を取り戻すのに苦労しております。

現在、個人的にも大学生の子がいますので、大学という場で働かせていただいているおかげで日々感じるものがあります。学生さんの立場を考えながら対応を心がけていきたいと思ひます。

どうぞよろしくお願いいたします。

事務局 就職支援員 唐澤 敏

この4月から、就職支援を担当しています。今のところ、求人票の受付など進路情報の収集と整理に追われる毎日です。

8年間の単身赴任生活に終止符を打ち、箕輪町の自宅から伊那谷の景色を楽しみつつ通勤しています。ラジオから流れる音楽などを聴きながらの運転ですが、見る角度によって変化する山々の姿や、日毎に移ろいでゆく木々の様子など、新しい発見もあります。また、夕方には元気がよく好奇心の旺盛な柴犬もどきの2才半の雄犬との散歩が日課です。今年から、ジャガイモやトウモロコシなどの作付けも増やしました。

経済学部を卒業してから民間に10年間勤務していましたが、思うところあって通信教育で教員免許を取得し、これまで県内の高校や県立歴史館でお世話になってきました。

高校現場では進路指導も担当してきましたが、大学との

違いに戸惑うこともあります。澁刺（はつらつ）と夢を育てている学生さん方に、今までの経験や知識が少しでも役立てばと思っています。よろしく、お願いします。

事務局 教務課職員 坂間 陽子

事務局教務課の坂間陽子です。前年度臨時職員として4ヶ月間勤めさせていただき、その縁もあってか4月より再びお世話になることとなりました。駒ヶ根市出身でありながら、大学周辺の緑の美しさに感動して出勤しています。回りの方々に助けてもらいながら、ようやく新しい環境に慣れつつあるところですが、何よりうれしい事は、数歩行けばすぐそこに図書館があることです。今年は読書量が増えそう楽しみです。その分運動量は減りそうですが…。

これからどうぞよろしくお願い致します。

情報処理室職員 小林 千恵子

4月より情報処理教室担当となりました小林千恵子です。出身は駒ヶ根市で昨年12月に東京からUターンしてきました。それまではSE（システム・エンジニア）として、主に生命保険会社や銀行などの汎用機のアプリケーション開発をしておりました。当初は自宅でプログラミングの仕事を細々とやっていたころかと考えていましたが、不思議なご縁で本学にお世話になることになりました。東京にいた頃は、月曜から金曜は毎日終電で帰っても、土日には水泳や陶芸教室に行く時間を確保することを心がけていましたが、今は趣味を持つ必要性を全く感じなくなり、趣味らしいことは何もしておりません。家の庭の山芍薬の蕾が開花するのを観るだけで充分満たされるような毎日を送っております。



* * * **リレーエッセイ** * * ***長野県看護大学での4年目を迎えて**

太田 克矢

最近、卒業研究の配属があり、着任時に講義をした1年生がもう4年生、早いものです。前任校の仕事は研究の比重が高く、講義や学生実験で学生と係わる機会は、本学に来てから急激に増えました。

研究でも、教育でも「実践や経験ほど身につくことは無い」と感じます。このことは学問の分野を問わないかもしれません。理科的視点の効果的な育成では、実際に現象を観察・経験することが、一番印象にも残ります。極端な話し、ここ駒ヶ根では実験なぞしなくても、お菓子の袋がパンパンと膨らんでいるのを見るたびに、製造地との標高差や、気圧の理屈を感じます。

僕はお世話になっている看護師さん達の卵に、理科的な素養を伝えたくて参りました。正直に言うと、一般的な看護学生さんに、理科が得意な人が多いとは、お世辞にも言えません。ただ、本学では学生実験等を生化学、生理学、感染学、解剖学そして病理学といった各分野で行う機会が得られます。専門的な実験器具を使つての体験は、就職後には困難でしょう。学生さんには食欲に取り組んで頂けたらと思います。

(本学教員、生物・化学講座教授)



●リレーエッセイを次に **中村美緒**さん(平成22年3月卒業)につなぎます。

成人看護学講座に異動して

早出 春美

4月から成人看護学講座へ異動し、あっという間のようで、長い1ヶ月半が経過しました。前職の基礎看護学講座では、真っ白な状態に看護を学び始める学生からの疑問や反応に、自分にもそんな時代があったかなと新鮮で懐かしい気持ちを感じながら学生とかかわって参りました。また、学生にとってわかりやすく興味をもてる授業とは？と常に試行錯誤しながら演習や実習を担当し、学びの多い2年間でした。

成人看護学講座では、自分の中で「看護」というものが少しずつ形成されつつある段階にある学生との関わりとなり、より実践的で高度な知識や技術が求められます。自身の看護師経験を活かし、患者さんに看護する楽しさ、難しさ、奥深さを一緒に学んでいきたいと思つています。また、学生の皆さんにとって少しでも役に立つ授業ができればいいなと思つています。でも、まずは、自分が新しい領域で看護を教えるための勉強を必死でやらないといけなという焦りがあるのも事実です。本当に、看護は常に勉強なんだと思つています。学生の皆さんにエネルギーをもらいながら、楽しく学んでいきたいと思つています。

(本学教員、成人看護学講座講師)



●リレーエッセイを次に **小林玲子**さん(本学成人看護学講座助手)につなぎます。

OBだより

皆様の中には、2002年8月に本学で開催された「第3回日本看護学生会（JNSA）」をご記憶の方も多くいらっしゃるでしょう。当時、本学3年生でこの会の代表を務められた柿沼佑果さんと、この春UCSFを訪ねた本学の教員が現地でも交流されました。そこで近年、卒業生として本学の看護海外研修に協力下さってきた柿沼さんに、本号より連載でアメリカでの活動を報告していただくことになりました。

柿沼さんは、2010年春現在、カリフォルニア州の登録看護師（RN）免許取得に向けて勉強中ですが、今後皆様と現在までの生活を含め、現地での臨床経験から考えることや、免許取得をめざして外国人として異国で働くこと、看護にまつわる色々なエピソードを共有できることを楽しみにされています。柿沼さんに聞いてみたいこと、ご希望があれば積極的に編集部までお寄せ下さい。

サンフランシスコからの風 第1回 「UCSF就職??」

柿沼佑果

皆さんこんにちは。

私は平成17年春に卒業後、虎の門病院に勤務後、2008年からアメリカ、カリフォルニア州サンフランシスコのUCSF病院（University of California San Francisco Medical Center）/小児病院にてアシスタントナースとして働いています。そして現在はカリフォルニア州看護師免許を取得するために勉強中でもあります。

今回から何度かに分けて皆さんにアメリカでの生活を含め、UCSF病院での経験を共有したいと思います。2008年にSF（サンフランシスコ）に移住前は異国の地が今後の生活拠点となるということに対して、不安もありましたが新鮮で、輝かしく思えたのを今でも覚えています。SFはアメリカで最もリベラルといわれる街で、人種文化ともに多様で、今でも自分が外国人であることを忘れることがあるくらいです。

アメリカは人種のるつぼといわれますが、まさにSFはその代表といっても過言ではないでしょう。日本街といわれるエリアもあり、そこに行けば殆ど日本の物は揃います。何よりダイソーがあることを知ったときは驚きでした。

これから、今でも忘れられない私のターニングポイントになったエピソードを紹介したいと思います。

ある夕方カフェで勉強していると、隣に座っていた人が「看護の勉強をしているのか」と話しかけてきました。日本でナースであったこと、CA（カリフォルニア）州看護師免許を取得したいことや、免許取得までの間アシスタントナースで臨床経験をしたいという話をしました。その彼はUCSF小児病院のナースであり、彼の所属する病棟でアシスタントナースの募集をしていたため「マネージャーを紹介するので話してみたらいいよ」と言うのです。さらに、

丁寧にも彼の名とマネージャーの名前と連絡先を教えてくれて、「直接病棟へ履歴書を持って行き、やる気ができるだけみせるんだよ。君なら大丈夫だよ」とも助言してくれました。UCSF病院は長野県看護大学大学院の研修校でもありますし、SFで私の最も就職したい病院でもありました。でも正直、彼との会話の中でアシスタントナースとして働きたいと言ったものの、日本から移住して数ヶ月、語学力、生後数ヶ月の娘を預けて仕事をする事、などを考えると私はまだほんとに仕事をしたいのかは半信半疑でした。

これは日本でも同じかもしれませんが、特にアメリカでは仕事の2年以上ブランクがあると再就職が難しいと言われています。さらに、看護師不足で有名なアメリカですが、CA州全体特にSFはアメリカ全土から看護師が集まりかなりの就職が難しいことで有名です。そのときすでに私は妊娠、出産を経て約1年半空いていたこと、また日本人で帰国子女でもない私がCA州看護師試験に合格しても、ミラクルが起こらない限りSFで就職することは不可能だと聞いていました。そのためにもアシスタントナースで働いて、医療界での経験を持ち、またアメリカのシステムや職場を知るといのは大きなチャンスでした。ひとつ就職についての補足をすると、アメリカでの就職形態は、各病棟ごとに予算が与えられておりマネージャーの権限で雇用の時期、人数などが決まります。日本のように病院が一斉に看護師を一定の時期に雇用するという形態ではありませんので、マネージャーに与える印象で就職の可否の殆どが決まります。

以上のような看護事情から、私は突然与えられたチャンスに挑戦してみることにしました。英語での履歴書づくりから、自己紹介の練習、質疑応答の練習、できる限りのこ

とをして、数日後彼の言われたとおり病棟マネージャーに会いに行きました。マネージャーは私の日本でのナース経験について質問し、履歴書を受け取った後、「履歴書を見たらまたこちらから連絡します。」と言いました。私はそれだけでも緊張して、どんな状態で家に帰ったのかは分からないくらいでした。

数日間病棟からの連絡があるのではないかと緊張して待っていましたが、1週間、10日経ち、連絡はありませんでした。2週間経ち私は、そんな簡単に都合よく就職ができると思った私が甘かったな、今はこの新しい国に慣れることや、子育てに専念しよう、でも勇気を持って行動に移したこと、何よりそれを経験できたことに感謝しようと思うようになっていました。

しかし、就職を諦めかけたその翌日、再び仕事を紹介してくれた彼に偶然にも道で会ったのです。私が2週間の経緯を話すと、彼は親身になり話を聞いてくれ「君なら絶対病棟に貢献できる人間だから、今すぐ私から直接メールをしてあげる」といいました。その数時間後に私に起こったことは私が願っていたことでした。私は病棟のマネージャーからインタビューになるべく早く来てほしいといわれ、インタビュー中に仕事開始時期や病棟の簡単なオリエンテーションをしてもらい、その瞬間から私のUCSF小児病院でのキャリアが始まったのでした。私をUCSFに導いた彼は、私に偶然会った翌日、アフリカでナースとして働くためにSFを発ち、彼がアメリカに帰国するまでの1年以上会うことはありませんでした。そしてこれは後から知ったことですが、1人のアシスタントナース募集に50人以上の募集があり、大半の応募者は履歴書さえマネージャーの目には留まらないというのが現状のようです。アメリカは実力社会

というイメージしかなかったのですが、UCSFでは少なくとも信頼できる人からの紹介が何より就職の優先になるということが常識になっています。

アメリカに来て数ヶ月、日常生活をようやく送れるようになっていた私、働こうと必死で就職活動をしていただけではないですが、必ずいつかRNになるんだという強い意志を持っていました。そういった中で、この彼との出会いは本当に奇跡的で、彼がなぜそこまでしてくれたのかは分かりません。しかし、この経験から学んだことは、自分に正直になり、自分のやりたいことへの情熱と意志を持続すること、さらに人にオープンに伝える勇気を持っていることが、こうした素晴らしい人との出会い、奇跡とも言えるような偶然を引き寄せたのだと感じています。そして、どの国にいても自分の周りにあるものに感謝して生活することが、自分の夢や希望の実現に最も重要なことなのだと信じています。

(次号に続く) (本学平成16年度卒業生)



2010年春、UCSFに訪問した本学教員との交流 (中央が筆者)

事務局からのお知らせ

平成22年度は105名の新入生を迎える

入学試験の状況は、下記のとおりです。一般入学試験の志願倍率は、前期3.8倍、後期は17.9倍でした。

4月6日(火)には、学部生89名、大学院生16名合わせて105名の新入生を迎えて、入学式が挙行されました。

平成22年度 入学試験の結果概要

(単位: 名)

区 分		募集人員A	志願者数B	受験者数	合格者数	入学者数	志願倍率B/A
学 部	一 般 入 学 試 験	前 期	4 2	1 5 9	1 4 8	4 2	3 . 8
		後 期	8	1 4 3	5 2	1 1	1 7 . 9
		計	5 0	3 0 2	2 0 0	5 3	6 . 0
	推 薦 入 学 試 験	3 0	4 3	4 3	2 8	2 8	1 . 4
	社 会 人 入 学 試 験	若干名	9	8	3	3	—
3 年 次 編 入 学 試 験	1 0	3 0	2 8	1 0	8	3 . 0	
大学院入学試験 (前期課程)		1 6	1 6	1 6	1 4	1 4	1 . 0
大学院入学試験 (後期課程)		4	5	5	2	2	1 . 3

平成21年度卒業・修了生の進路状況について

平成21年度の学部卒業生は91名、博士前期課程修了生は6名、後期課程修了生は該当者がありませんでした。

進路状況の全般については、以下のような特徴がみられました。

- ①卒業生数の増加もあり、看護師（69名）・保健師（11名）および助産師（7名）とも就職者数がそれぞれ昨年度を上回った
- ②県内の医療機関等への就職者数は54名（62.1%）であり、昨年度に引き続いて上昇傾向にある
- ③就職先として、県内外の都市部大規模病院や大学病院等を志願する者が多数を占め、県外出身者については出身地へUターンするケースが多くみられた

- ④具体的な就職先としては、信州大学医学部附属病院（12名）が最多であり、諏訪赤十字病院（5名）がこれに次いで多かった
- ⑤看護師の国家試験に不合格者が出たこともあり、内定先に就職ができずにやむなく3名が家居となった
- ⑥県外の大学院保健学研究科への進学者が1名みられた
- ⑦県や市町村の保健師への希望者が多くみられた一方で、依然として募集枠が少なく採用については厳しい状況であった
- ⑧養護教諭についても義務・高校ともに募集枠が少なく、昨年度に引き続いて採用がなかった

1. 学部卒業生（91名）

(1) 進路状況

区 分 職 種 等		就 職					進 学	合 計
		看 護 師	保 健 師	助 産 師	教 員	小 計		
地 域	県 内	40人	9人	5人	0人	54人	0人	54人
	県 外	29	2	2	0	33	1	34
計		69	11	7	0	87	1	88

(2) 就職先

(家居3)

① 長野県内

病院…飯田市立病院 伊那中央病院 健和会病院 小諸厚生病院 佐久市立国保浅間総合病院 佐久総合病院 信濃医療福祉センター 昭和伊南総合病院 篠ノ井総合病院 信州大学医学部附属病院 諏訪赤十字病院 長野県立こども病院 長野県立須坂病院 長野市民病院 長野赤十字病院 長野中央病院 長野松代総合病院 松本協立病院 丸の内病院

保健師…安曇総合病院 佐久総合病院 北信総合病院 市町村役場(飯田市 松本市 飯綱町 山ノ内町)

② 長野県外

病院…井之頭病院 大阪府済生会吹田病院 葛飾赤十字病院 神奈川県立こども医療センター 公立陶生病院 国立療育医療センター 湘南鎌倉総合病院 聖隷浜松病院 聖路加国際病院 順天堂大学医学部順天堂病院 千葉西総合病院 手稲溪仁会病院 東京医科大学八王子医療センター 東京慈恵会医科大学附属病院 同青戸病院 東京大学医学部附属病院 東京都済生会中央病院 獨協医科大学病院 虎ノ門病院 豊橋市民病院 名古屋第一赤十字病院 名古屋第二赤十字病院 名古屋大学医学部附属病院 富士宮市立病院 三井記念病院

保健師…市町村役場(御前崎市 春日井市)

2. 大学院博士課程前期修了生（6名）

大学教員2名(本学)、看護師2名(県内)、保健師1名(県内)、助産師1名(県内)

2010年度 新任教職員

次の皆さんが着任されました。どうぞよろしくお願ひいたします。

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
	学 長	阿 保 順 子	事務局	局 長	小 林 資 典
病態・治療看護学	教 授	坂 田 憲 昭	教務課	課 長	大 塚 俊 英
基礎看護学	助 教	伊 藤 郁 恵	総務課	課長補佐	高 橋 和 宏
成人看護学	講 師	早 出 春 美		主 事	加 藤 恭 央
	助手(臨任)	増 尾 美 帆		就職支援員	唐 澤 敏
精神看護学	講師(臨任)	北 村 育 子		学生支援員	堀 内 みちよ
	助 教	有 賀 美 恵子		情報処理室	小 林 千 恵子
母性看護学	助手(臨任)	森 野 貴 輝			
	助手(臨任)	西 野 自由理			

長野県看護大学同窓会（鈴風会）からのお知らせ

暑気日ごとに加わり、皆様方におかれましては、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。鈴風会では新たな同窓会役員となり、大澤拓（学部5期生）会長を中心に、“会員同士のネットワーク強化”と“同窓会活動の充実”という基本方針を立て活動を行っております。

第8回同窓会総会 & 第2回同窓パーティー が開催されました

去る2010年1月23日に、鈴風会総会ならびに同窓パーティーが開催され、24名の御参加と、133通の委任状を頂く事ができました。ご多忙にもかかわらずご来場いただきました会員の皆様、教職員の皆様、さらには、委任状の返信を頂いた会員の皆様に深くお礼申し上げます。

総会では、学長との面談についての質問や会計についての確認など、会員の皆様からたくさんの御意見や御指摘を頂くことができました。総会で承認いただきました2010年度の活動方針に加えて、皆様から頂いたご意見をもとに、本年度の同窓会運営に努めていく所存です。同窓会は会員の皆様はもとより、本学に在籍されております教職員の皆さまや在学中の皆さまからも広く御意見や御要望を頂きたいと考えておりますので、積極的に御意見をお寄せください。

同窓パーティーでは、和やかな雰囲気の中で学長をはじめ教員の皆さまと同窓生の交流を行いました。長野県看護大学初の同窓生を輩出してから15年が経過したこともあって、お子様連れで御参加いただいた方も多く見受けられました。今回は新しい試みとして軽音楽サークル卒業生による演奏も行われました。同窓パーティーは同窓生の交流の機会としての在り方を模索しながら行っておりますが、皆さまからのアイデアを今後も取り入れながら企画運営できれば幸いです。なお同窓パーティーにつきましては、参加人数が限られている現状や予算、また、会員の皆さまからの御意見も踏まえまして今後は2年に1回の開催とさせて頂く予定です。詳細につきましては別途お知らせいたします。

もともと同窓生の交流の場として位置づけられたパーティーですので、継続の形について検討を続けると共に、新しい形で皆さまの交流に寄与できることがあれば、ぜひ実現して行きたいと考えております。一緒に同窓会活動を創り上げていきましょう。

今後とも、鈴風会への御参画をよろしく願いいたします。

（同窓会会長 大澤 拓）

☆平成22年度 事業計画☆

【基本方針】

- ◎ 会員同士のネットワーク強化
- ◎ 同窓会活動の充実

【活動内容】

1. ホームページおよびメーリングリストの活用
2. 同窓会活動の充実
3. 会員サービスの検討
4. 母校との連携

☆平成22年度 執行部役員が決定しました☆

- 会 長 大澤 拓（学部5期生）
副会長 中村 充浩（学部2期生、修士6期生）
 中畑 千夏子（修士6期生）
会 計 曾根 千賀子（修士1期生）
 白井 史（学部1期生）
庶 務 葛城 晴佳（学部6期生）
 酒井 久美子（学部1期生）

よろしく申し上げます。

*同窓会ホームページ&メーリングリストのご案内

同窓会ホームページが新しくなりました。まずはアクセスしてみてください。

* トップページ<<http://www.suzukazekai.com/top.html>> 鈴風会からのお知らせなどをご覧ください。

* 執行部ブログ<<http://suzukazekai.sblo.jp/>> 母校の出来事や、最近の駒ヶ根の様子などをご覧ください。

* 鈴風会メーリングリスト：御連絡いただければ、メーリングリストに登録して、会員同士の相互発信が可能です。登録を御希望の方は、以下の内容を「メーリングリスト申し込み専用Eメール」へお送りください。携帯電話からも登録できます。

①氏名（旧姓）（フリガナ）・入学年度または学籍番号

②登録希望メールアドレス

③連絡先住所・電話番号

④勤務先（任意）

⑤同窓会への御要望等（任意）

メーリングリスト申し込み専用

E-mail:dousou_ml09@suzukazekai.com

会費納入のお願い

終身会費は1万円です。皆様の会費で同窓会は運営されていますので、納入をお願いいたします。振込み先は以下の通りです。

郵便局普通預金口座

口座番号:0581-1-79696

加入者名:長野県看護大学同窓会鈴風会

ご質問・ご意見および住所等変更は下記連絡先へ
長野県看護大学同窓会

〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694番地

E-mail ; suzukazekai_20@suzukazekai.sakura.ne.jp

Fax ; 0265-81-1256

ホームページ : <http://suzukazekai.com/top.html>

● 2010年度 オープンキャンパスのお知らせ ●

来る7月24日(土)に、下記要領にてオープンキャンパス(大学説明会)を開催いたします。高校生の方、保護者の方、高校の先生方、編入希望の方、社会人の方、また、学部のみならず大学院への入学希望をもっていらっしゃる方も、是非お越しくださいますようお願い申し上げます。

日 時：平成22年7月24日(土) 12:30受付開始 開会13:00~16:00

場 所：長野県看護大学講堂および学内施設(長野県駒ヶ根市赤穂1694番地)

日程：13:00 開会・ご挨拶

13:15 本学の教育の概要について

13:25 学生生活について

13:35 就職状況について

13:45 先輩からのメッセージ

13:55 休憩

14:10 キャンパスツアー

14:15 個別相談コーナー

15:00 模擬授業：看護大学の講義に潜入体験「必須!! 国際看護ができるチカラ」
学生相談コーナー、体験コーナー

16:00 終了



● 2010年度 長野県看護大学 第1回公開講座のご案内 ●

平成22年7月24日(土) 10:30-12:00

オープンキャンパスと合わせて開催いたします。

講義テーマ：認知症の人々が創りあげている世界—語られなかった言葉を探して—

講師：長野県看護大学 阿保 順子 学長

オープンキャンパス・公開講座のお問い合わせ先

長野県看護大学事務局

〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694

TEL：0265-81-5100 FAX：0265-81-1256

ホームページ：<http://www.nagano-nurs.ac.jp/>

編集後記

本学初の「専門看護師」誕生となった加賀田さん、米国でのRNに挑戦する柿沼さん、本学の教員に着任された卒業生の皆さん…卒業生の皆さんの各方面での活躍が実感できる学報をお届けすることができました。また、今回は新スタートをきった本学の様子を中心となりましたが、次号では皆様からの積極的な投稿を歓迎致します。

宮越幸代 白井史 熊谷真盛